
魔法少女リリカルなのは 英雄達の邂逅

監督提督

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 英雄達の邂逅

【Nコード】

N7883T

【作者名】

監督提督

【あらすじ】

タイトル変えました 2011年10月12日

あらすじを大幅に編集しました 2011年10月12日

高校に進学したばかりの少年、清白 健は、下校途中で車に引かれそうになっている女の子を助け、命を落とした。

…だが、世界を見守る神とその従者に出会い、別世界へ旅立つこ

ととなる

その行き先は……「魔法少女リリカルなのは」
手にした“力”。

魔法少女達との“出会い”

更なる“転生者”

そして次々現れる、“別世界の英雄達”

これは、有り得ない出会いが紡ぐ物語。

さあ、はじめよう

参戦作品

（ ）はマシンのみ参戦（ ）

“魔法少女リリカルなのは”

“真（チェンジー！）ゲッターロボ 世界最後の日”

“ミュータントタートルズ（2003Ver）”

“武装神姫”

・・・話」そうして、その世界は生まれたんだ」

その世界には、元となった世界があった

その世界の、お母さんとも呼べるような、そんな世界があった
った

そして、その世界には、自分と同じように、お母さんから旅
立った兄弟達がいた

兄弟達は、みな多かれ少なかれ、お母さんの真似をしていった

その世界も、お母さんを参考にしようと思いついた

けど、兄弟達には負けたくなかった

だから、“招く”ことにした

“招く”ために工夫を凝らした

そうして生まれた、新たなる“可能性の世界”

“もしも” “if” で形取られた、“平行世界”

ら”

.....

“もしも、願いを叶える石が、お母さんの世界より強かった

.....

“もしも、あの本の謎が、1つ明らかになったとしたら”

.....

これは、そんな小さくも大きな世界の、成長祿

招かれし英雄達が折り重なる、特別な物語

00話「これが噂のテンプレート……か？」 (前書き)

ここ数ヶ月、地震やそれに伴った学校のゴタゴタもあり、すっかり萎えてしまった製作意欲を蘇らせるために書き起こした新作でございます

プロットは粗方まとまっていますが、実は構成がまだイマイチだったりします(えー)

本作は多重クロスもの小説です

が、最初から参戦作品を書き出しているには、ネタバレで面白くないので、登場次第、あらすじに書き足すこととします

そんなこんなで、やや見切り発車感が否めませんが、お付き合いいただけたら幸いです

それでは、はじめます(ノ・・・)ノ三

00話「これが噂のテンプレ……か？」

唐突だが、俺の名前は清白健^{すずしろけん}。

都内の公立高校に通い始めたばかりの、オタクに片足を そろそろもう片方の足も入りつつある 突っ込んだ、健全な15才男子だ。

身長は175cmとまあまあ高めで、足もそこそこ長い。

ついでにガキの頃から続けてきた空手と水泳のおかげで、人並み以上の身体能力を持つてるし、腹筋だって割れてる。

自分で言うのもなんだが、なかなか理想的な体型をしていると思う。

…ただまあ、顔に関しては中の中……。いや、ギリギリ中の下？
美形とは間違っても言えないし、微妙に残念な造形してるのは、
否めないよなあ。

中学の頃、クラスメイトに「ギリギリ残念な奴」と称されたのは
いい思い出。

…え？ 苦い思い出の間違いじゃないのかって？

いやあ、自分が不細工なのは自覚してるし、今更そんなこと指摘
されたって笑い話にしかなんないよ。

第一、「美形」なんて俺のキャラに合わないし。

……てか、俺は一体誰に自己紹介を…

「すみませんすみませんすみませんすみません！！本っ当にすみませえん！！」

「……申し訳ない」

「あ、いや……うん…」

…ああ、そっか。

逃避してたのね、俺。

00話「これが噂のテンプレ………か？」

「うつく……ひつ……すみま……せん……。ほんと……に……グスツ……すみましえん……!!」

「わかった、わかったから泣かない！泣かないで！ほらハンカチとティッシュュ！」

「うう……ズビーーッ!!」

「ちよ、そっちハンカチ！」

哀れ、俺の使い古された紺のボロハンカチは、目の前で泣きじゃくる女の子の鼻水でエライことになってしまった。

てか、こっちが被害者のハズなのに、何だろこの罪悪感……。

よし、とりあえず現実に戻ったことだし、再度状況を整理してみよう。

…いや、うーん。

被害者………か？

~~~~~

思い返すこと数十分前。

まだ高校に進学して数日目の放課後、知り合ったばかりの友人と駅前で別れ、俺は1人家路へとついていた。

その途中には、二車線のそこそこ大きな車道が通っていて、俺はその横断歩道を渡って登下校しているのだが、そこに、1人の女の子がいた。

背丈から察するに、年齢は10〜12才か。

栗色のショートヘアで、前髪には白いメッシュが入っていて、さらにそこから生えた同じく白いアンテナ髪がヒョコヒョコ揺れている。

まだ春も半ばなかにさしかかったかどうかも曖昧な時期なのに、ノースリーブの真っ白なワンピースを着て、足元は素足にひまわりのワンプイントがついたサンダルを履いてるのみ。

そんな、季節から微妙に浮いてる感じの少女は、何かを探しているのかしきりにあたりを見回している。

キョロキョロキョロキョロキョロキョロキョロキョロキョロ……………。

「……………」

うん、すげえ挙動不審。

必死な様子でキョドってる少女を眺めること10秒程。

だんだんいたたまれなくなってきたので声をかけようとした、そ

の時だった。

「ひゃ!?!」

「あっ」

足元が疎かになっていたのだろう。少女は足をもつれさせてしまい、その小柄な体がぐらりと揺れた。

その先には、反対側の歩道まで並んだ並行な白線。

さらにその先には、赤く光る歩行者用信号機。

そして

「危ねえっ!!」

「ふあっ……」

清白 健。享年15才。

下校中の交通事故により、永眠。

~~~~~

と、まあそんな経緯があり……

「わたつ……うぐ、わたしのせいでえっ……清白さんが……清白さんがあ」

「だから泣かないでくれってば……。なんかこう、俺が虐めてるみたいな気分になるだろ？」

俺、死んじやいました。

とっさに女の子助けて。

その時の女の子が、今、目の前で泣きながら謝り続けてくる少女であり、そんな彼女を死んだハズの俺が何故かこうしてあやしている。

彼女の名前はミユー。

ぱつと見は人間以外の何者でもないが、実は齡85年の鼠の化身なのだという。

まさかのロリババアかよ!?!…とか反射的に思ったけど、彼女らの業界で換算すると、普通に俺よか年下らしい。

「今回の件は、完全にこちらの落ち度だ。清白 健くん、本当に申し訳ない」

と、もう1人。ミューちゃんより一歩引いた位置に正座している初老の男性が、沈んだ表情で俺に頭を下げてる。

白い長布を体に纏った、素人目でもわかるこう、圧倒的なオーラを放つこの人。なんと、俺が生きていた“世界”を管理している神様らしい。

で、ミューちゃんはその従者の1人とのことで、たまたま地上に降りてきていたところで、俺を巻き込んでしまったのだという。

神様、鼠の化身、死んだハズなのにピンピンしてる俺……………

ファンタジーおっそろしいわ。

「いつ、いえそんな!どっちかって言えば俺の自尊事故みたいなものですし…」

「しかし、そういうわけにもいかんのだよ」

そう、仮にも神様の使いであるミューちゃんが、車にはねられた程度で死ぬわきゃあないのだ。

仮に打ちどころが悪くて致命傷を負ったとしても、神様の力であつという間に全快できたんだそう。

そうとは知らず勝手に首突っ込んで勝手に死んだんだから、本当なら自尊事故と一方的にぶつたぎられても仕方ないと思う。

……まあ、て言っても俺なんざ、所詮ただの一般^{バンビ}人だし？思うところがないわけじゃないんだよ？

ないんだけど……

「えうっ……ううっ……ぐずっ、ふえええ……」

「ああもう、よしよしよしよし……」

自分が原因の一端とはいえ、見ず知らずの俺の死をここまで悲しんでくれるミューちゃん。

その可愛らしい顔は色々な液体でもうグチャグチャのボロボロだ。

こんなの見せられちゃあ、その、もうね。

怒りとか苛立ちとかが、保護欲やら申し訳なさに徹底的に塗り潰されてっっちゃって、どうでもよくなっっちゃうわけですよ。

「はあ、女の子の泣って卑怯だわ……」

「それを差し引いても人が良すぎると思うが……」

「？　なんか言いました？」

「いや、何でもない」

ミユウちゃんの頭をヨシヨシしてる横で、なんか神様がブツブツ
言ってたんだけど……？

…まあ、いいやな。

とりあえず、さっきから……冒頭からずっと気になってた点がひ
とつ。

「……………」

今自分がいる室内を、ぐるりと見回してみる。

こじんまりした部屋の中には、畳の床、ちゃぶ台、アンテナ付き
TV、黒電話などなど、昭和チックな家具が並ぶ。
灯りについておらず、光源は窓から差し込むオレンジ色の夕日の
みだ。

「あの、今いるところって、いわゆる神の世界なんですよ？」

「うむ、君が起きてすぐに説明した通りだ」

「…どう見ても3、40年前の借家なんなんですけど」

「趣味だ」

「そうですか」

神様が昭和好きって一体……？

しかも、この部屋にはさらに気になる点がある。

「なんか、デジャヴるもんがあるんですけど」

「わかるのかね？実はこの部屋、モロボシ・ダンとメトロン星人が対談した部屋を再現しているのだよ」

「ウルトラセブンですか」

「趣味だ」

「そうですか……」

やべ、なんかスツゲエ親近感湧いた。神様相手に。

とかなんとかやっってる内に、ミューちゃんも落ち着いてきたようで、俺の手が頭にのっかったままシユンとうなだれている。

それを見計らっていたのか、神様はミューちゃんを横目でチラ見してから、

「さて…、まずは根本的な“世界”という概念について話をねばな
そう切り出したのだった。

ふう、これでようやく詳しい話が聞ける…。

“世界”とは無数に存在し、その数だけ、異なる文化、異なる環境、異なる技術、異なる社会が存在する。

中でも“格”の高い世界は、他の世界へその“力”を及ぼ

し、それによって歴史が変わったり、新たな“並行世界”が誕生したりする。

…が、そういった“世界改変”現象はそうそう起こるものではなく、大抵は力を及ぼした世界の歴史が、空想の物語として紡がれる場合がほとんどである。

そうした数多の“世界”を管理し、見守っているのが“神”と呼ばれる者達であり、その管理する世界の“格”により、その神が行使できる“力”も変わってくるのであった。

「ってことは、俺が見てきた漫画やアニメなんかも…」

「うむ。名作と呼ばれる作品の大半は、外の世界から流れてきた情報から作られたものだ」

まっ、マジか…！

てことは、さっき話題に出たウルトラマンが実在する世界も存在する、ってわけで、他にもあんな世界やこんな世界も……

やっべえ！オラ、ワクワクしてきたぞ！！

「それらの世界には、その歴史の中核を成す人物、物語で言うところの“主人公”達が存在し、世界の中での重要なファクターとなっているのだが……」

実を言えば、君もそのファクターの1つだったのだよ」

「え？」

え、ちょ……なにソレ？

「主人公とまではいかないが、その主人公に度々関わる脇役のような存在だったのだ」

俺の人生、犠牲バント

ふと、何年か前に旅行先でふざけて買ったTシャツにプリントされている一文が、頭をよぎりました。

すると、神様の説明で再びこみ上げてきてしまったのだろう。またもミューちゃんがぐずりだした。

「わたしが……わたしが悪いんです……！わたしが“世界”を見てきたいなんて……うっ、言ったから……」

「だーっもう、わかったから！もういいから泣かないで。ね？ね？」

俺は俺でヨシヨシを再開させつつ、こと俺がピチュるに至った細かい経緯を、なんとなく悟った。

おそらく、ミューちゃんが下界……って表現でいいのかな？
ともかく、俺が生活してる世界を見たくなくなったんだろう。

で、下界見物してる途中でたまたま俺と遭遇した結果………こうなっちゃいました、と。

「うむ……、概ね君の想像通りだ。

さて、清白くん。君には選択肢が2つある」

「選択肢？」

あ、やっぱり何らかの救済措置は取ってくれるんだ。
神ってごう、尊大なイメージがあったけど、この神様ヒトの場合、人の良い中間管理職って感じだなあ。

……あれ？最初に感じてた圧倒的なオーラは一体どこに？

……セブンのせいかな？

……まあ、それは置いてくとしてだ、

「一つ目は「元いた世界に転生。ただし、清白 健としてではなく、別人として……ですか？」……その通りだ」

察がいいな、と神様が感心してるけど、ちょっと考えればわかることだ。

「元通りに生き返らせるんなら、最初から選択肢なんて言い方しませんがね」

「ふむ、確かにな」

事故で突然死んでしまったんだから、それがなくなって元通りになれば万々歳だ……が、世の中そんなに甘かない。

おおかた理由としては、俺が死んだことで“俺という存在”が世界からなくなったことになってしまったとか、そんなところだろうな。覆水盆に返らず、とはよく言ったもんだね。

「自身のことだというのに、随分と達観した物言いだな」

「え。いやまあ、よく言われますね」

ムウ、冷静でいるとどうにも客観的な口調になっちゃうんだよね。そういや前、先生にも「自分のことを他人事みたいに話すのね」って言われたなあ。

起きてすぐの時は怒り浸透だったけど、泣きじゃくりながら謝罪してくるミューちゃんを見てたら、なんか収まっちゃったんだよね。

これでいいのか、自分。

「？」

っと、無意識の内にミューちゃんを見つめてしまっていたらしい。未だ目尻に涙を浮かべ、こちらを見上げるミューちゃんの頭を、何でも無いよ、と二度ナデナデ。

「ふゆ…」

「…そして二つ目だが」

もう慣れた、とでもいったげな顔で神様がまた口を開いたので、神経をそちらに向けることにする。

え？ナデナデはやめませんよ？

なんか中毒性あるわ、このコマンド。

「君の好きな、アニメやゲーム…の元となった世界。そこに、君をつれていくことができる」

「なん…だと…!？」

思わず口に出しちゃったよ…。

さっきから何となく感じてはいたけど、コレってもう完璧、同人小説そのまんまの展開だよね？

いや、実際に見たことはないんだけど、友達からそういうのがあ
る、ってのは聞いてたし、どんなのがテンプレなのか、ってのも聞
いてる。

そのテンプレの条件と、今俺のこの状況が、まさに合致している
ワケさ！

「ただし、こちらは一つ目以上に遥かにリスクが伴う」

「リスク、ですか」

ああ、やっぱりね。世の中そんなに甘か(略

「まず一つ、戸籍や住居などを用意することができない。戸籍を用意するということは、すなわちその世界の社会に介入することになってしまう」

なるほど、あくまで見守る立場の自分達が実世界に介入することは好ましくないと。

「次に、好きな世界を絶対を選ぶわけではないということ。これは、向こうの世界にも私のような神がいて、その神と交渉しなければならぬからだ」

まあ、先方にだってそれぞれ事情があるだろうしねえ。

…あ、また他人事みたいに言っちゃった。

「最後に、これが最も重大なことだが…。他世界にも影響を及ぼす程の世界だ。何かしらのトラブルが起こるのは間違いない。厄介事、で済ませられる事象ならいいが、あるいは災厄と呼べるような大惨事が、君の身にも降りかかる可能性があるのだ」

…確かに、フィクション作品には何かしらの事件や事故がつきものだよな。

ガンダムなら戦争。仮面ライダーなら悪の組織。ウルトラマンなら怪獣…といった具合に、だ。

で、それが一体何を意味するのかわからないほど、俺は子供じゃない。

「……っ」

自分の無残な末路が脳裏に浮かび、俯き、息を呑む。

そんなことになるぐらいなら、ミューちゃん庇って死んだまま、さっさとあの世に逝つていた方がマシだ。

わざわざ辛い死に方を選ぶほど、俺はMじゃない。

…言つとくけど、Sでもないからね。念のため。

「どちらを選ぶかは君の自由であり、私達は一切口出ししない。

…しかし、君をむざむざ死地に送り出すのは、私としても不本意だ」

「死ぬ前提で話進めないでくださいよ、怖いから…」

「前者ならば君をそのまま送り出すだけだが、後者を選ぶのであれば、私は協力を惜しまない」

「いやスルー……って、協力？」

死地、って単語でイメージがより鮮明になったけど……“協力”
ということとは、つまり……

「うむ。先程話した“災厄”……。これに対抗しうる“力”を君に授
けよう。

無論、君が望む形の“特別な力”をな」

俺に……“特別な力”？

しかもオーダーメイド！？

「お、俺の望む形ってことは、その、何でもいいんですか！？」

「ああ。ただし、私の公使できる力の範囲内で、となってしまうが」

オイオイオイオイ！！マジか！神様サービス良すぎねえ！？

い、いや。命かかってんだから、ある意味当然だよな。

俺の望む形……つまりは俺の理想！

それこそ全身ガンダムとか、ウルトラマンに巨大化とか、仮面ラ
イダーに変身とか、好き放題なワケじゃん！制限付きだけでも！

「…どうするのかね？」

「うーん……」

ミューちゃんを撫でる手は、いつの間にか止まっていた。

なので、俺は自然と空いた右手を顎に当て、そのまま考え込む。

すぐ隣でミューちゃんが不安げな顔で俺を見上げてるが、それすら気にならなくなっていた。

「…片や平凡な日常……」。

…片や命懸けのヒーローライフ（仮）……か」

…でも、平凡が平和に直結するとはまず限らない。

平凡は平凡なりに、やれ受験戦争だ、やれ就職難だ、やれリストラダの何だの、その他多数諸々……」。

厳しい現実つてのが、どっかしらで必ず待ってるもんだ。

…ふと、隣のミューちゃんに視線を向ける。

「……………」

「…あ、えと。私の顔に、何か着いてますか？」

考えようによっては、今回のトンデモ事故が無けりゃ、この子に会うこともなかったんだよな。

「……………」

……………もし、異世界に行つて、夢と妄想の中でしか会えなかった憧れの人物達に、出会うことができたなら…。

「……………俺は」

もし、俺が力を手にすることで、その人達を助けることができるなら……………

「異世界に、行きます!!」

それって、スツゴイ楽しそうじゃんか！

[…へっへっ]

00話「これが噂のテンプレ……か？」（後書き）

脳内でゴタゴタものを考えがちだが、考えがまとまらなければ、と
りあえず行動に移すかほうり投げるかのどちらか

常に客観的視界のわりには楽観的で、大抵のことは根に持たないお
人好し

それが、我らが清白 健くんであります

01話「じゃっぴなからそんない」とゆんかー」

「……………んーす……………ち…ー」

……………んん…

「…ちこ…ち…ー」

…んだよづるっさいな……………今日何曜日だっけ…？

「すず…ちんー」

昨日金曜だったから………土曜じゃんか……。
ったく、休みなんだから寝かせてくれよ母さん……。

…どーせ、「休みだからっていい気になって寝てるな」…とか言
うんだろ？冗談じゃねーよホント…

「…清白さんッ！…！」

…んあ？

「私、清白さんのお母さんじゃありません！とっ、とにかく起きて
くださいよお！」

…聞き覚えはあるけど、いまいち聞き慣れない声がある。

頭の中がゆっくりと起き出し、俺は薄く目を開けた。

「うつ」

目を開いた途端、上瞼と下瞼の隙間から強烈な光が差し込み、思わず顔をしかめる。

でも、おかげで一気に目が覚めた。

「あれ？」

ようやくと思考がクリアになったところで、俺は辺りを見渡した。

ブランコ、シーソー、滑り台といった遊具が並び、それらで遊ぶちみっ子達と、それを見守りつつ井戸端会議に興じるお母さん方の姿が見える。

どうやらどこかの公園らしく、俺はその中のベンチに腰掛け、寝こけていたらしい。

備え付けの時計は3時ちょっと前を指していて、頭上ではやや傾いた太陽が照らしている。さっきの強烈な光はこの直射日光で間違いない。

と、現状の把握が粗方終わったところで、俺は自分の身に起こったことを思い出した。

「そっか俺、異世界に…」

冷静に思い返してみればまさに夢みたいな出来事だったが、残念ながら夢じゃあない。

もし夢なら、日光で目がチカチカしたりなんてしないしね。

01話「しよっぱなからそんなことゆうんかい」

…あの時、異世界へ渡る　と決意表明した俺は、すぐさま俺が身につける“力”について、神様とじっくりこつこつてり話し合った。

その条件は、神様が行使できる力の範囲内で、かつ俺の趣味を押しやされたモノであること。

まず初めに、某丸丸ガンダムとか真なる竜、ワガママシヨタ魔王とか地球育ちの最強野菜人とか、その辺りのチートスペックが軒並み却下されました。

が、まあそんなんは初めっからわかりきってたから、そこは「ですよねー」で流しておいた。

単に言いたかっただけという（笑）。

でも、その後は特におちゃらけたりせず、真剣に話し合いを進めていったよ？命かかってるわけだし。

『これぐらいなら大丈夫ですか？』

『フム……。それなら、少しばかり余裕ができるぞ』

『じゃあ、こんな感じのオプションを付けて……』

『ふむふむ』

『あわよくばこんな感じにパワーアップも……』

『……できなくはないが、多少のリスクが伴ってしまうな』

『あ、やっぱり。でも、起死回生の一手は用意しておきたいんですよ。隠し玉ってことで』

『うーむ……。よし、ならば』

……と言った具合に話しは進み、最終的には双方納得の仕上がりとな相成りました。

俺としては、当初はもっと弱体化を強いられると思ってただけに、これは嬉しい誤算だった。

ちなみに、ミューちゃんは座布団を枕にしてぐっすりおねむしてました。

まあ、端から見れば大の男2人が、クソ真面目な顔して妄想オタ談義してるだけだったろうから、眠くなるのもしょうがないわな。

そうして、めでたく俺の力も決まり、神様の力で遂に異世界旅行へ旅立ち……すぐに意識を失って……

「今に至る、と」

「はい!」

「よし、ちょっと待って」

「はい?」

…いやね、気付いてたんだよ?最初から。あえて触れずにいただけ。

「……ミューちゃん?」

「はい、何ですか?清白さん」

画面の前の皆さんはとっくに気付いていたと思うけども、冒頭で俺を起こしていたのは紛れもない、神様で鼠の化身のミューちゃんである。

ちょこん、と首を傾げると、前髪辺りから一本伸びているアホ毛が一緒にふよふよ揺れる。

その上で、くりつとしたオレンジがかった瞳で俺を見つめてくるその仕草は、非常に可愛らしい。

の
だ
が
、

問題はそこじゃなくて…

「何でいるの？」

「はうっ！ま、まずかったですか…？」

「イヤイヤイヤ違う違う！」

ミユーちゃんの目尻にいきなり涙が溜まり始めたんで、俺は必死で首と手を小刻みに振る。

おかげで涙は零れずに引っ込んだけど…、この子涙腺モロすぎねえ？

「あ、あの…実は、神様命じられてきたんです。現地で清白さんの手助けをするように、と」

「手助け？」

「はい。神様は『力を授けたとは言え、見知らぬ世界に単身放り出されるのは酷だろう』…そうお考えになったんです。そこで、その助けになるよう私を清白さんと一緒にこの世界に送られたんです、けど……やっぱりご迷惑でしょうか？」

「いや、それならそれでありがたいんだけど……」

実を言えば、独りきりで動くのは寂しいな…とか考えていたわけで、ミューちゃんが同伴してくれるならそれはそれで嬉しい。

なんせ、この世界には友達も、先生も、家族も、誰もいないわけだし……。

…ともかく、正直一抹の不安は残るが、一緒にいてくれる人がいるのはとても心強い。

ただ、違う意味での懸念が1つある。

「神界サイドの人が実世界に干渉するのって、マズいんじゃないか？ たっけ？」

「あ、そうなんですけど、その…。神様が仰るにはですね、私1人ぐらいなら何とか誤魔化せるから、そこは気にしなくていい、と…」

「…神の世界ってのも、存外アウトなのね」

よくよく考えてみれば、日本神話だと、頂点に位にいるはずの天照大神が、いじけて天の岩戸に引きこもったりしてるし、ギリシャ神話に至っては昼ドラも真っ青な愛憎劇が繰り広げられている。ゼウス、節操無さ過ぎだから。

どこまでが本当かはわからないけど、わりかし間違っではないいな、とそう思った。

「とりあえず動こうか。ここでじっとしてたって、イベントが降って湧いてくるわけでもないし」

「あ、はい。わかりました清白さん」

「……うーん」

「え？」

……ミューちゃんてどうにも固いんだよなあ。

控えめなのは元々の性格だからしょうがないんだけど、でも、こつも他人行儀なのは息が詰まるし。

……といつことば、

「ミューちゃん。俺のことは名字じゃなくて、名前で呼んでくんないかな？健、って」

「ええっ？そんな……でも……」

案の定、ミューちゃんは頬を染めてもじもじしてしまっている。

しかし、これも今後の精神衛生のためだ。

固い呼び名が定着する前に軌道修正を図らねば！

「ホラ、俺達って少なくとも当分は一緒にいるわけだし、堅苦しいのは抜きにしてさ」

「でも……」

「確かに一悶着はあったけど、俺はミューちゃんと仲良くやっていきたいしき。そのためにも……ね？ダメかな」

俺は座っていたベンチから立ち上がり、しゃがみこんでミューちゃん目線を合わせ、極力押し付けみたいな口調にならないよう気をつけ話した。

長時間動かないでいたせいで固まっていた膝がポキポキ鳴ったが、気にしない。

「……………」

でもミューちゃんは、俺から視線を逸らすように俯き、黙り込んでしまった。

うーむ…。やっぱり強引だったか？

と、そんな悲観的な考えが頭をよぎったのだが…

「…わ、わかりました」

「おっ、」

どうぞやら杞憂だったらしい。

「清白さんさえよろしければ、えと、健…さんと、呼ばせてもらいます」

「…ん、ありがとう。んじゃあ、俺はミューって呼ばせてもらうけど、大丈夫？」

「はっはい！全然大丈夫です！」

さん、はまだ抜けないけど、現状としてはこれが彼女の妥協点だろう。これ以上無理を言うのは良くない。

「よし。じゃ、改めて…」

「んっ…」

目線の高さはそのままに、俺は右手を出してミユウの頭に優しくのせる。

そうして、これから長い間、一緒に過ごすことになるであろう相棒に、ゆっくりと笑いかけた。

「これからよろしく、ミユウ」

「……こちらこそ、よろしくお願いします。す　健さん」

……うん。

やっぱりこの子には、ひまわりみたいな満面の笑顔がぴったりだ。

何にせよまずは情報収集だー…ってなわけで、無駄ばな…げぶん、世間話に興じていたお母様方に最寄り駅への道を聞き、移動を開始した俺達。

その道すがら、ふと重要な事実を把握してないことに、今更気づいた。

「そついや、こつって何の世界なの？」

実は俺、神様からどの世界に行くのか聞いてなかったりする。

好きな世界を選ぶわけではない、と最初に言われたので、

『じゃあせめて、常に死と隣り合わせになるような世紀末な世界にならないよう、お願いします』

と、それだけを神様に告げて、後はお任せしちゃったんだよねこれが。

「え？えーと確か……」

「…もしかして、ミューも聞いてないとか言わないよね？」

「いえっ、確かに聞いたんですけど、えーと……」

どうにも記憶が曖昧らしい。

…多分、能力会議からの流れで聞いたもんだから、半分寝ぼけてたんだろーね。

「たしか……“尻軽なのか？”……って」

「絶対違うと思う」

「はうっ！」

むしろ違ってほしいと切に思う。

異世界旅行の行き先がそんな昼ドラじみたタイトルだなんて、考えただけで滅入ってくる。

…しかもタイトルのほうが聞いてきてるし。

知らんがな。

「ま、思い出せないんならしょうがない。

すぐに困るわけでもないし、ひとまずそれは置いといて」

「うう…すみません」

「いや、だから謝らなくても……アレ？」

「？　どうかしましたか？」

ふと気がつくのと、自分が今どこを歩いているのかがわからなくなっていた。

道を聞いたと言っても口頭だったから、話しながら歩いてる内にわからなくなつたつぽい。

おまけに、現在地は住宅街の真っ只中。

どっちを向いても一般住宅しかないので、にっちもさっちもいなくなつてしまった。

「あちゃー……」

「ど、どうしましょう」

「どーするもこーするも、テキトーな通行人もいつかい捕まえて道を聞くしか……おっ」

辺りを見渡したまさにその時、道行く先から小さな女の子が3人、仲良く並んで歩いてくるのが見えた。

第2町人まちびとはっけーん！！（違）

「ごめん君たち、ちょっといい？」

「えっ？」

小走りに近付いて声をかけてみたら、談笑していた3人の女の子が、一斉にこっちを向いた。

ミユより低い背丈から見ると、年は多分10才前後。

白いお揃いのワンピースを着ている所から察するに、制服制の私立小学校の同級生なのだろう。

髪型も個性的で、右から金髪ロング、栗毛ツインテ、紫ロングと色鮮やか。

髪の毛に関する規制はないらしいけど……にしても紫ってのは、パンチ効きすぎなんじゃなからうか。

「…ちょっと、一体何なんですか」

「ア、アリサちゃん！」

と、気付けば金髪の子が腰に両手を当て、警戒心剥き出しの目で俺を睨んできていた。

栗毛の子が控えめにたしなめているけど、まあいきなり声をかけたきた男にジロジロ見られたら、ちみっ子とは言えいい気はしないだろう。

いけね、完全にガン見してた。

「アリサちゃんダメだよ、初めて会う人にらんだりしちゃ」

「でもすずか！」

「まあまあアリサちゃん……」

「なのはまで!？」

ふむ、金髪の子がアリサ、紫ロングの子がすずか、栗毛の子がなのは、とけっこうらしい。

…ん?どっかで聞いたような……

「あ、あの健さん。早く道聞いたほうがいいんじゃない？」

「そういう君は、なして俺の背中に隠れてるのさ」

「うっ」

どうやらこの子、控えめで泣き虫な上、人見知りもする質らしい。人間社会だと真っ先に苦労するタイプだな…。

数分後、アリサちゃんが落ち着くのを待ってから、事情を話したら、すずかちゃんが丁寧かつ、非常にわかりやすく教えてくれた。

話しをしていて何となくわかったんだが、この子けっこうなお嬢様らしかった。この年で既に、言葉の端々にうっすら気品を漂わせている。

最近の子供は発育がいい…なんて話をよく聞くが、精神面に関しても同じことらしい。

ちなみにその間、アリサちゃんは仏頂面で俺を睨み続け、なのはちゃんは自分も、と身振り手振りをまじえて教えてくれようとした。…が、どうにももうまくいかず、1人でわたわたアワアワした挙句、口を尖らせしょんぼりしてしまった。

ミューと違って積極的なんだけど、どうも似たような匂いにするなあこの子。

「何かわからないことありますか？」

「いや全然！わざわざ地図まで書いて貰っちゃったし。飴ちゃんの1つでもあれば良かったんだけど…」

「いえそんな、お礼なんていりませんよ」

ってか、飴ちゃんは愚か、アルミ製の一円玉硬貨すら持ち合わせていないという。

真正正銘の無一文です。

「…悲しいけど、これって現実なのよね」

「はい？」

「いや、こつちの話」

そんな他愛もない会話を一言三言かわしてから、俺達はすすかちやん達とすれ違うようにして別れた。

「…いちえんだくまのく、たぐびくがくらっすく　ひとりぼっちでく、どくくへくゆっくく」

とりあえず、駅まで出たらバイトの求人情報調べないと……。
って、そういや戸籍無いんだよなあ……。
うーん、せめて日雇いのティッシュ配りでもいいから何かしらあればいいんだけど……。

なんて世知辛いことを考えつつ、平成歌謡曲“一円玉の旅がらす”を口ずさみ歩く俺。

ミューがキョトンとしちゃってるけど、テンションを保つためなので理解して欲しい。…うん。

異世界生活1日目は、まさに前途多難

「いやああああッ!?!」

そりゃもう、新手のイジメか!ってぐらいに。

「ッけ、健さん今の!?!」

ミューの顔が驚きと困惑に染まっている。そりゃそうだろう。

なんせ、ほんの数秒前まで聞いてた声なんだから。

「すずかちゃん!?!」

慌てて、元来た道を逆走する。

ワンテンポ遅れでミューが俺の後ろからついてくる。

すずかちゃん達と談笑していた位置を通り過ぎ、3人が曲がって
いった角から飛び出せば…

「っ!!なのはちゃん!アリサちゃん!」

そこから更に奥へ行った路地の手前で尻餅をついている2人の姿が目に入り……

そして、

“遠ざかっていくエンジン音”が、注射針のように、ゆっくりと俺の耳に突き刺さった。

すずか side

「う…?」

…あれ?私どうして…。

「しかしよオ、ガキ1人にこの大人数は大袈裟じゃねえか?なあ」

「そんなこと、俺達みたいな末端が気にすることじゃねえ。まして、お前みたいな新入りならなおさらな」

「へエへエ、そうかよ」

耳から、目覚めたばかりでぼんやりしている頭の中に、知らない声が入ってくる。

何となく大人の男の人であるのはわかったけど
と、そこ
まで考えて、今の私の状況を思い出した。

「(そつか…。私、誘拐されて…)」

知らないお兄さんに道を聞かれて、その後すぐに突然目の前に現

れた車に引き込まれて、暴れてみたけど薬で呆気なく眠らされて…。

「っ…！」

そこまで考えたところで、急激に私の心を恐怖が支配する。

目を開けようとしたけど、目隠しがされて何も見えない。

口にも布が巻かれてて声を出すことができないし、手も足も縛られてて、もそもそ芋虫みたいに動くのがやっと。

絶望的な状況に、嫌な考えが頭の中を次々巡る。

…私、これからどうなっちゃうんだろう。

何で、私なんだろう。

……私が、“化け物”だから？

もう、みんなに会えないの…？

いや…怖い…怖い…怖いっ！

「ん…？目が覚めたらしいな」

と、近くにいた人が近づいてくるのを感じた。

ドクン、と心臓が鳴り、更に上乗せされた恐怖で身が縮こまる。

「オイオイ、安心しろよ嬢ちゃん。じっとしてりゃ手荒なマネはしねーさ。」

…俺達は、ただどなア」

そんなこと、教えてもらっても気休めにすらならない。

人の気配が間近に来たのを感じるけど、逃げたくても逃げられない。

男の人は下品な口調で笑いながら、さも愉快そうに私に言う。

「じゃ、いい気分はしねーだろうが、まあゆっくり休んどけよ？」

“吸血鬼のお嬢さま”

瞬間、背中を鋭利な氷柱で突き刺されたような悪寒が、頭の先からつま先まで突き抜けた。

「（あ……あ……！）」

全身の毛が逆立つような、そんな気持ち悪い感覚。

鳥肌が立ち、喉が乾き、吐き気までが込み上げてくる。

「“夜の一族”……だったか？ウチの首領^{ボス}が、その体の仕組みに興味があるんだそうだ。

ま、大方解剖でもするんだろうが……もったいねエな」

「何だ。お前、幼女趣味でもあったのか」

馬鹿にするような口調で言うもう一人に、近くの男は「んなわけねエだろ」と吐き捨てる。

そして、私の髪が、お姉ちゃんやノエル達にも誉められた密かな自慢の髪が、何かによってなで回される。

多分、男の手だと思う。

気味の悪さに、吐き気が増した。

「見るよこの髪、この肌……。そこの女にはそうそうねエ上物だ。このまま10年もすりゃ、犯し甲斐のあるいゝ女になるぜ。だろ」？

「…なるほど。そう考えれば、確かにもったいない気もするな。クッ」

「へへへッ…」

2人の発する嫌らしい笑い声に、私の心が悲しさや怖さ、寂しさでどどん塗りつぶされていく。

「（いや…こんなイヤだよお…………）」

歯止めも利かずポロポロ涙がこぼれ、目隠しの布を濡らしていく。

「（お姉ちゃん……ノエル……ファリン……）」

私にできることは、心の中でただ助けを呼ぶことだけ。

…でも、そんなことしたって、何の意味もない。

「（恭也さん……おじさん……おばさん……）」

でも、それでも、願わずにはいられない。

そうでもしないと、あっという間に心が壊れてしまいそうだから。

「（なのはちゃん……アリサちゃん……）」

…ふと、さっきのあの人のことを思い出す。

女の子を連れてて、初対面で、道を聞かただけで、ちょっと会話をしただけだった。

…でも、優しそうな人だった。

「（お兄さん……）」

誰でもいい。

誰だって構わない。

誰か……誰か

「（誰か、助けてえっ！！）」

ガシヤアアッ！！

「へ、なっ…ガッ!？」

「（……え?）」

何が起こったのだろう。

急に、髪の毛を好き放題にした男の気配が、くぐもった悲鳴と一緒に離れていった。

と同時に、男の指が引つかかったのか、目隠しがハラリと床に落ちる。

感じる解放感に、恐る恐る目を開けてみた

「（…へっ？）」

思わず固まってしまった。

怖いとかじゃなく、単純な驚きで。

八方を無機質なグレーで囲まれた、あまり広くない空間。

申し訳程度の灯りしかない暗がりな部屋の中で唯一、外からオレンジ色：夕暮れの光が差し込む、天井に空いた穴。

その穴から

「（…腕？）」

太くて大きな黄色い腕が伸び、私の目の前で止まっていた。

人間ではけして有り得ない長さ、陽光を反射して光る黄色い表面。

そう、まるでそれは“ロボットのよう”で”

「いよっ、とおー!!」

ドガシャアアア!!

「!?!」

瞬間、掛け声と共に、なにかが天井を突き破って、私の目の前に落ちてきた。

「（きゅっ!?!）」

破片に思わず目を瞑った私だけ……いつまで経っても全然痛くない。

「（え……）」

ゆっくり目を開くと、先程の腕が、ぐるぐると私を守るように覆っていた。

「大丈夫？怪我とかしてない？」

その腕の隙間から向こう側、優しげな声で、ソレは話しかけてきた。

「ちょっと待ってて。コイツらちゃちゃっとかたして、その縄すぐに外してあげるから」

胸に緑色のガラス窓のようなものがついた、真っ赤な逆三角形の体。

足はなく、代わりに白い宇宙船のような形をしたものの両側に、キヤタピラがついている。

体の上には四角形の頭がちょこんとのっついていて、その両側から白と黄色の丸っこい角のようなものがある。

そして、体からから伸びに伸びた、長い長い黄色の腕。

「何者だ貴様！！」

「何者って、そりゃこっちのセリフだッ！」

何その格好？忍者気取り！？…いやむしろ忍者じゃなくてニンジャ？…いや、どつでもいいや！」

63

「（あれ…。この声、どこかで……？）」

ふと、ソレが発する声に、聞き覚えがあるような気がした。

数秒考えて……ついさっき思い返したばかりの、あの笑顔を思い出した。

「（お兄……さん？）」

「ゲッター3、参上ッ!！」

お兄さんの声をしたソレは、夕陽の照らす中、高らかにその名乗った。

「くじくじ」

01話「しょっぱなからそんなことゆづんかい」(後書き)

[Information]

「アニメ “真(チェンジ!)” ゲッターロボ 世界最後の日
参戦」

02話「だから言ったじゃん、前途は多難だって！」

よく狙って狙ってえ……、

「伸びろっ！ゲッターアーム！！」

俺の叫びと共に、ゲッター3の右拳がターゲットの屋根、指示されたその一点へ伸びていく。

“自分の腕が伸びる”という何と云い表せばいいのかよくわからない感覚に、若干の戸惑いを覚えたが、オープンゲッターに比べれば大分マシだ。

と、俺の拳はそのままだ目標の屋根をブチ抜き、中にいた何かを殴り飛ばした。

「いよっ、とおー！」

その勢いに任せ落下した俺は、持ち前の重量で小穴があいた屋根に更に大穴を開けてやった。

「大丈夫？怪我とかしてない？」

中に入し、まずはすずかちゃんの無事を確認。

間違っても破片で怪我なんかしないよう、右腕でインスタントシエルターを作ってみたが、うまくいったみたいだった。

まあ、すずかちゃんの安全性を考えた上での3チヨイスだったから、うまくいかなかったら俺がへこむ。

…問題があるとなれば、伸びたアームの隙間から覗くすずかちゃん、両手足を縛られ、口にも布で猿ぐつわが付けられていることだ。

パツと見、乱暴はされてないようなので一安心だが、それでも痛々しいのに変わりはない。

「ちょっと待ってて。コイツらちゃっちゃとかたして、その縄すぐ外してあげるから」

そう言うてから、“敵”へ振り向いたのだが……

「何者だ貴様!!」

……はい？

俺としては誘拐犯ていうと、こつ、テンプレなチンピラとかを想

像していたんだけど……

俺の前で慌てて短刀を構えたソイツは、何故か黒とグレーを基調とした“忍者ルック”で、顔もまた似たようなカラーの覆面で完全に隠していた。

横をチラ見すれば、ついさっき殴り飛ばした奴も同じ格好で……
どうやら、コレがユニフォームらしい。

「何者つて、そりゃこっちのセリフだッ!!」
何その格好？忍者気取り!?!…いや、むしろ忍者じゃなくてニンジヤ?」

なんかこう、アメリカ人青年とかが勘違いしてそうな、そんな感じがするデザインなんだよな。

「…いや、どうでもいいや!」

いずれにせよ、罪のない子供を誘拐するような下衆びた連中をほっぽっとく義理なんかありゃしない。

さあ、宣戦布告だ!

「ゲッター3、参上ッ!」

02話「だから言ったじゃん、前途は多難だつて!」

すずかちゃんが誘拐された

この世界にやってきてからまだ1時間も経ってないのに、そんなの関係ねえ! (古) とばかりに飛び出してきたこの事件。

悲鳴を聞いて駆けつけた時には、誘拐犯の車は既に走り去った後で、その場には尻餅をついて呆然としているアリサちゃんとなのはちゃん(なのはちゃんに関しては何も知らず放心状態に近かった)が残されているのみだった。

本当なら、ここで年長の俺が2人 (+身内1人) を落ち着かせ、警察への通報や事情説明のために残るべきだったろう。

しかし、俺は2人へ軽くフォローだけして、後のことを2人に任せアタフタしているミューの腕をひつつかんで走り出した。

今にして思えば完全に最低野郎の所業だけど、それ以上の“興奮”が俺を支配していた。

もちろん、突然の事態に多少パニックっていた部分もある。

ただ、すずかちゃんが誘拐されたことを理解した瞬間、俺の頭に神様のあの言葉が浮かんできた。

『危機へ対抗するための“力”を、君に授けよう』

…そう、俺は試したくなっただ。

すずかちゃんを助けたい？お礼がもらえるかも？女の子にモテるかも？

それもあつた。

…しかしそんな事は二の次だった。

神様と相談の末、俺が手にした力、“初代ゲッター（チェンゲ仕様）への変身能力”

コレを試せる機会が、早々と巡ってきたことに、

憧れていた空想のヒーロー達と同等の力を手にした俺の初陣に…

俺は、舞い上がっていたんだ。

「大分頭冷えました……」

まあ若さゆえと言っかなんと言っかね、こっぴつ緊急事態は後先を見据えて動くべきだよな。

飛び出したはいいけど、犯人の居場所とか行き先とか、サッパリ
だったんだよねえ、アハハ〜……………情けないorz

で、それに気付いた時には後の祭り。

戻ろうにも、がむしゃらに走っていたせいで完全に迷子状態。

このままじゃ事件も解決できないわ、道もわからないわで、俺個人
の状況は最悪な状態に落ち込んでいた。
精神的な意味でも。

「…あの、健さん？なにブツブツ言ってるんですか？」

「へ？あ、いやゴメン。えと、方角はこっちで合ってる？」

「はい、このまま真っ直ぐ飛んでください」

しかし、その光明は意外な所から差してきた。

orzつてた俺に、「あの、私…あの子の居場所、わかるかもし
れません…！」とミューがおずおずとだったが、目に力を入れて進
言してきたんだ。

聞けば、ここにきて初めて、ミューのスキルがなんと“サーチ特
化”であることが判明したのだ！

曰く、戦闘力はからっきしな代わりに、気配察知、空間把握、嗅
覚や聴覚がズバ抜けているらしい。

しかも、それらをフル活用することで熱源反応を感知したり、壁

を隔てた向こう側を探ったり、果てには今いるこの街全体を調べることが可能と言っから驚いた（ただしすっごい疲れるらしい）。

神様からのお墨付きというこの能力、今この状況ではまさに渡りに船というヤツである。

というわけで、ほのかに自慢気なミューをひとしきり賞賛してから、すずかちゃんの居場所の特定をお願いし、ゲッター1に変身してから彼女を抱え飛び立ち、現在に至る。

…え、初変身なのに変身シーンはないのだった？

そういうのは、人前でやるからこそ意味があると思うんだ（キリッ

」にしても、我ながら便利だなあコレ」

「本当に気付かれてないんですね……透明マントってすごいです」

初飛行ということと、俺自身の興奮を抑える意味もあり、慎重な飛行を続ける。

そんな中、下を見下ろす俺達は今、ちょっとした感動を覚えていた。

現在、俺はゲッター1に施したオプション兵装“ミラージュウィング”で、抱えたミューごと全身を包んでいる。

これは、カメレオンのように周りの色に溶け込むための迷彩マン

トで、真つ赤なゲッター1が真つ昼間から我が物顔で飛んでたら、まず間違いないく面倒事になると思ったからだ。

あれば何かと便利だろうと思って実装したけど、効果のほどは「
覧の通り。」

眼下の人達は、こっちに気付く様子は一切ないみたいだった。

「よし、そうとわかれば急ごう！」

ちよつとスピード上げるぞ、しっかり捕まってる！」

「はっ、はい…ひゃあ！」

風を切り、閑静な住宅街の上をゲッターが飛ぶ。

その感覚をマントゴしに感じながら、俺は先を急いだ。

徐々に固く、鈍くなっていく体と思考を内心で叱咤しながら。

夕陽が徐々に顔を出してきた。

空が上がってわかったことだが、この街は海と山に挟まれ、しかし田舎というわけでもなく、中心部には立派な高層ビルも立ち並んでいる。

いいところだな…というのが俺の素直な感想だ。

「で……この辺り？」

「そ、そのはずなんですけど……」

そして俺は、その中でも山あいの街外れギリギリまで来ていた。

ミューが言うにはこの辺りなんだけど、怪しい車両や人影は特に見当たらず、彼女は周辺へキョロキョロ目を走らせている。

俺も、ミラージュウィングを纏ったまま宙に浮かび辺りを見回すが、目に入るのは木、木、木……ついでに細い車道が一本のみだ。

「なるほど、あの道路を使ったのか……」

さっきから見てるがこの道路、全くと言っていいほど車の通りがない。

どこへつながってるのかは知らないけど、多分普段からこんな感

じなんだろづ。

「つてことは…一足遅かつ

「健さん！あそこ！あそこ見てください！」

見つけた!？」

悲観的になりかけたその時、ミューが突然大声を出し、いずこかを指差す。

弾かれるように首をそちらに向けると、車道の一部に空き地のようなスペースが隣接しているのが見えた。

Uターン用スペースか何かか？道細いし。

…でも、その中にはこれといって何も無い。

誘拐犯の車は愚か、廃車の一台すら見当たらなかった。

でも……

「んん…？」

何か、何かおかしい。

何の変哲もない、アスファルト地面の空き地のはずなんだが、じつと見てると妙な気分が湧いてくる。

小骨が喉に引っかかったような微妙な気持ち悪さ。

これは……

「…デジャヴ？」

そんな呟きを聞いていたのかいないのか、空き地を凝視していたミューが口を開いた。

「あそこの端に、周りの色と同化した大きな車が止まっています！」

もし今の俺が生身だったら、思わず目を見開いてたと思う。

「周りと同化……って、俺達と同じ迷彩処理!？」

「はい。しかも、レベルも同等みたいです。普通に見ただけじゃ、絶対にわかりません。」

…あの中から、すずかちゃんの気配がします!」

オイオイオイオイ!

いくら大企業のご令嬢とはいえ、子供1人誘拐するのにそんなハイテク車両持ち出すか!?

どんだん話がキナ臭い方向へ向かっていくな……どうなってんだ?

「……まあ何にせよ」

ミラージュマントを解除。

と同時に、マントで体を覆ったゲッター1の姿が夕焼け空の下に曝される。

「何であんな所で休憩してるのかわかんないけど、チャンスは今!」

「はっ、はい! すぐかちゃんを取り戻しましょう!」

臆病なはずのミューだけど、怖じ気づいた様子はないみたいだ。

いざという時は肝が座るらしい。伊達に神様の部下やってたわけじゃないってことが。

…俺は、正直怖い。

チャンス!…なんてわざわざ声に出したのも、今にも引き返してしまいたい自分を押しとどめるためだ。

……下手をすれば、殺し合いになるかもしれない。

なんでもかんでも 自分の事ですら 客観的に見てしまうのが俺のクセだが、それが裏目に出たらしい。

「(…能力に溺れてみつともない真似さらすよりはマシ、か)」

油断は禁物だが、ただの人間に負けるようなゲッターじゃない。

「…サポートよろしく、ミュー」

「ははっ、はい！任されました！」

精神的タフさには自信がある。

これぐらいで………ダウンなんかするかいっ！！

「ゲッターパンチ!!」

「うぶオ!!」

ゲッター3の左ストレートが文字通り伸び、もう1人のニンジャもどきの顔面へ!

仰向けに倒れた相手はピクピクと痙攣している。気絶したらしい。

「まだまだア!!」

車両前方へ目を向ければ、運転席に通じる扉から更に2人出てくる所だった。

「先手必勝!!」

「ガッ!?!」

「ぶほっ!!」

有無を言わさずゲッターパンチの餌食にしてやりました!

「……………以上？」

『（みたいですよ）』

車内が静まり返って数秒、中のミューに確認すると、肯定が返ってきた。

え、ミューがどこにいるのか？

それは……………とりあえず後！

まずはすずかちゃんが優先！

未だ呆然とした様子のすずかちゃんを拘束している縄、そして猿ぐつわを外してあげる。

…ゲッター3の太い指に一抹の不安がよぎったけど、意外に器用でした。

「お待たせ、大丈夫だった？」

「……………」

努めて明るく、かつ優しい声で語りかけてみたけど、すずかちゃんには俺を見つめたまま微動だにしない。

そりゃまあ、いきなり屋根突き破ってキヤタピラ装備のロボットが登場すれば普通に驚き桃の木扇風機

「…………お兄さん？」

「へ？」

今なんつった？この子。

「あのっ…………さっきのお兄さん…………ですか？」

「…………あ”！」

そう言えば俺、正体隠すこととか全然、これっぽっちも考えてなかった！

完っ完全に念頭から外れてたよ！？

「イイヤイイヤイヤまさか！すずかちゃんとは初対面で……」

「…あの私、まだ名前言ってないんですけど…………」

墓穴掘ったアア

アッ！！

「（ヤツベ、正体モロ出しじゃん！！頭も尻も何ひとつ隠れてないじゃん！てか数分会話しただけの相手の声とか普通気付く！？この状況で！

ん？つかそもそも正体って隠すべきなの？いや隠するのが常道ではあるけれども、常識に捕らわれ過ぎるのは良くないってどっかの偉い人も言ってたし……）」

「あ、あの……」

『（け、健さん！何か近づいてきますす！！）』

「はっ！？？」

いかん、周りが見えなくなってた……ん、増援！？

「何かってなに!？」

『(えと……人みたいです。数は6……ふええっ!?)』

「!?!? どした!?!？」

「えっ?えっ?」

脳裏に響くミューの驚愕に、俺も声のトーンが上がってしまふ。

『(速すぎます!普通の人じゃな…あぁっ!?!?もつきますッ!?!?)』

「くっそ、ザコだけかと思ったのに!」

せめてインターバルぐらいくねってのちくしょめ!!

「すずかちゃんはどこでじっとしてて!絶対に出ちゃダメだからね
!?!？」

「え、あのっ、お兄さん待っ……」

ボガンッ!!

車両最後部、荷台の扉をゲッターパンチで粉碎し、キャタピラを唸らせ外へ飛び出す。

気付くと、真っ黒で妙な装甲車が姿を表していた。

多分、天井ブチ抜いた際に迷彩が解除されたんだろう。

「はあッ!!」

「いッ!？」

気付いた時には時既に遅し。

間髪入れずに懷に飛び込んできた2つの人影。

その手に持った刃がほぼ同時に俺の腹と胸目掛け突き出される。

が、

ガギギッ!!

「痛つつ!?!」

「なっ!?!」

「えっ!?!」

驚愕の音が3つ、ほぼハモった。

今の俺の体はゲッター合金で全身を防御している。

なので刃物で刺されたところでかすり傷にしかならないわけですが……がやっぱ多少は痛いんです!!

『(健さん上!?!)』

「つつ!?!」

ミューの叫び(俺にしか聞こえません)に上を見れば、ガタイのいい人影がもう一人、得物を振りかぶって跳躍していた。

ってかアレ刀!?!しかも人間が跳べる高さじゃねーよちょっと!?!?

「いい加減につ……ゲッターアアア ムツ!?!」

「何!?!」

「ぎゃっ!?!」

やられっぱなしなわけにはいかないの、ゲッターアームを盛大に伸ばして振り回す！とにかく振り回す！！

さすがに腕が伸びるのは予想外だったんだろう。

懐の2人は慌てて跳びずさり、上の1人は器用に剣ではじき、伸びたアームを踏み台に後退した。

ん？よく考えてみたら、どうせ刀なんて効かないんだから…最初の2人倒せたんじゃない？

「くそっ、ミスった…！」

焦りは禁物って事だな、今後の教訓にしよう。

「…随分と奇抜なのが出てきたわね」

「お嬢様、下がっててください」

アームを元の長さに戻し身構え、ようやく相手を確認することができた。

「な、何今の…腕が伸びた！？びゃーって！」

「落ちて着け美由希、どうせ相手は人間じゃない！」

「恭也の言う通りだ。どんな手を隠しているのかわからない、油断はするな！」

忍ちゃんは後ろへ！ノエルとファリンは忍ちゃんを！」

「はい！」

「了解です士郎さん！」

まず、こつちから見て手前にさっきの刀持った3人が並んでいる。

ややうるたえ気味のポニテ&眼鏡の女子に、

鋭い目つきでこちらを睨む青年。さらにその間に落ち着きはらった様子の男性が1人。

後ろにはメイド姿の女性2人が並んでいて、その奥に紫ロングの女性が1人。

ミューが捕捉した6人で間違いないだろう……

「ちょっと待った！何故にメイド!？」

前衛3人はいいとして、後衛おかしいだろ!!

見るからに戦闘力皆無だよ！何でいるのよ!？何しにきたの!？

「あなたに答える義理などありません」

「そんなことより、早くすずかちゃんを返しなさい!」

「え?」

すずかちゃんを返せ?……アレ?

そう言えばこの人達、覆面でもなければニンジャ服でもないな。

メイド2人以外は完全に私服だし、最後尾の紫色の髪ってひょっとして……

「……返せって言われて返すぐらいなら、最初から誘拐なんてしないわよね」

「はいっ?」

コレ……ひょっとして俺が犯人だと思われてる?

誤解されてる!?

「ちょ、違」

「何かひと騒ぎあったみたいだけど……ノエル」

「はい。すずかお嬢様はあの車の中にいます。」

そして、すずかお嬢様と目の前の物体以外に反応はありません」

「そう、ありがとう」

やっぱり！この人達すずかちゃんの身内だ！すずかお嬢様言ったもん！

「いや俺は」

「状況はよくわからないが、こちらとしては好都合だな」

「うん、そうだね恭ちゃん！」

銃刀法違反3人が構え直した！？

マズイ！これは不毛でしかない！！

「待ってください！違います！俺は」

「悪いがそっちの問答に付き合う気はない。こちらも余裕がないんでね…！」

ッッッ…！！

「これが……殺気!？」

「……いくぞ!！」

「「応!！」」

真ん中の男性を先頭に、刀を構えた3人が切り込んでくる!

男性が正面から、青年が右、女子が左から。

ダメだ!止められないッ!!

「くっそお!!!ゲッター!！」

「ちめてええ

ッ!!!!!!」

「「「!?!?!」」」

悲痛な叫び声に、全員の動きがピタリと止まる。

3つの刃はそれぞれ俺の顔から数cmのところまで止まっ
ていて、正直言つて超怖い。

「「「すずか!?!(ちゃん!?!)(お嬢様!?!)」」」

叫びの主は言わずもがな、すずかちゃんだった。

彼女は扉を失った荷台の先で、制服の裾を握り締め、涙目で俺達
を見ている。

「おじさんも恭也さんも美由希さんも、もうやめて!その人は私た
ちの味方だよ!」

「「「えっ!?!」」」

むこうの皆さんが呆気にとられた目になる。
けどそれは俺も一緒だった。

「待ちなさいすずか!?!どういことなの?」

「お兄さんは、ゲッター3さんは私を助けてくれたの！だからお願い、もうやめてお姉ちゃん！！」

まさかここでするかちゃんが弁護してくれるとは！しかもあんな必死に……。

…うん。ちょっとじーんときた。

てか、一番奥の人はお姉さんだったのね。

「「「……………」」」

しばし、沈黙が場を支配する。

5秒…10秒…15秒と経ち、そろそろ空気の重さが辛くなってきた頃……

『（なッ ……！？）』

「！？」

最初に口を開いたのは、ずっと黙っていたミューだった。

『（そんな……こんな近くまで……気付けなかった……？どうして！？）』

『

「ミューー！？どうしたんだよミューー！！」

ただならぬ様子のミューーに、状況も忘れて大声を出してしまう。

くそっ、ミューーの動揺が俺にまで伝染してきた！

すずかちゃんをはじめとした周りの人達がぎょっとして俺を見た、その時だった。

ザザザザザザザザザザザザザザザザ……！！

「こ、コイツら！？」

突如姿を表したソイツら。

見渡す限りニン、ニン、ニン、ニンニンニンニンニンニンニン
ン！！！！！

ついさつきKOした連中と、同じコスチュームのニンジャもどき共が、圧倒的な数で、俺はもちろん、すずかちゃんやすずかちゃんのお姉さん達をも包囲していた。

「な、なにこいつら！？忍者！？」

「チツ、こんな数、一体どこから！？」

「（！）そうか、それでか！」

ミューの十八番はサーチ全般。

初戦闘による緊張があつたとはいえ、この人数を捉え損ねたなんて、初めてだったんだろう。それで怯えていたんだ。

しかし、相手は曲がりなりにも忍者。しかも、完全迷彩仕様の特殊車両を持ち出すような連中だ。

気配をほぼ完全に隠すような、何らかの技術を持ってても不思議じゃない。

「…！こいつらまさか！」

「ノエル！ファリン！貴女達はすずかを！」

「はい!」

お姉さんの指示が飛び、メイド2人がすずかちゃんのもとへ向かおうとする。

「……………」

「っ!」

が、俺達とすずかちゃんの間にはニンジャもどき共が割って入ってきた。しかも、

「……………」

「ひっ!」

すずかちゃんがいる荷台の奥、そして屋根の上にも現れやがった。
野郎!

「すずかちゃん逃げろ!」

「あ…………っ、こないで!」

「……………」

とっさに叫んだ俺だが、すずかちゃんは腰を抜かしてしまったよ
うで、その場へへたり込んでしまった。

「（くっ、ゲッターアームで間に合うか!?!）」

何とかすずかちゃんを守ろうとアームを伸ばそうとした……………

「ッハア!?!」

「うぐっ!?!」

「オラよッ!?!」

「…?」

下ササミ!?!

「「「!?!?!」」」

荷台に現れたニンジャもどきの背後、暗がりの中からいきなり脚が飛び出し、ニンジャ2人はすずかちゃんを飛び越えコンクリの地面に倒れた。

また増えた…とか、このタイミングで助っ人…とか、驚いた理由はいくつかあるけど、そんなのはオマケだ。

…なぜなら、出てきた脚が素足なのに“グリーン一色”だったから!

「アチヨ!!!」

「うぁッ!」

「そらっ!!!」

「ぐっは!?!?!」

更に、屋根の上のニンジャまでもが、2m程下の地面へ落下してしゅ。

代わりに、屋根の上には新たな助っ人の姿があった。

「まさか、久々の再会がこんな形になるなんてねえ……。もうちよつと穏やかな方が良かったんだけど」

目元に紫のバンダナを巻き、得物である棒を構えたそいつは、困ったように言った。

「ヤッホー シロちゃんキョウちゃん、それにミユちゃんも元気だった？」

こんな状況にも関わらずニコニコ笑うそいつは、目元にオレンジ色のバンダナを巻き、両手に持ったヌンチャクを振り回している。

「お前達!？」

「ウソ、いつ日本こほきたの!？」

刀を持った2人が言うと、荷台の奥から、さっきの脚の主達が出てきた。

「ま、フット団がウミナリに出たって時点で、こうなるんじゃないかと思つてたけどな」

ややドスの利いた声でそう言うそいつは、赤いバンダナを目元に巻き、サイと呼ばれる十手のような武器を両手に1つずつ構えている。

「成り行きだけど、加勢するぞ！シロウ、キョウヤ、ミユキ！」

敵を油断なく見据え、刀を2本、二刀流で構えたそいつは、青いバンダナをつけている。

「そうか、君達がいるということは、やはりフット団か…！」

さっきから父さんとかおじさんとか呼ばれてる人が、そばで何か呟いてるけど、俺はそれどころじゃない。

今の4人が、ただの助っ人だったならこうはならなかったろう。

しかし、俺は完全に固まってしまっていた。

恐怖？違う。驚愕と歓喜で、だ。

なんせ、“グリーン”の体”に“グリーン”の甲羅”を背負ったこの4人は、俺が憧れるヒーローの1つなんだから！

「おじさま、あの4人を知ってるんですか？」

「ああ、もちろん」

俺だってもちろん知ってる

長兄にしてリーダーのブルー、レオナルド。

熱いガッツのレッド、ラファエロ。

ムードメーカーのオレンジ、ミケランジェロ。

ブレイン担当のパープル、ドナテロ。

「彼らはタートルズ。頼もしい助っ人さ」

ひよんなことからヒト型の姿に突然変異した、ミュータントアメリカ・ニュー
ヨークを守るシャドーヒーロー……

テイマシエタートルズ
TMNT!!

【くじっ】

02話「だから言ったじゃん、前途は多難だって！」（後書き）

[I n f o r m a t i o n]

「アニメ、 “ ミュタントタートルズ（2003Ver） ” 参戦」

03話「戦えることと戦つことは違う、って誰かが言ってたよね」

……改めて、自分がズブの素人であることを思い知らされました。

「さすがだなキョウヤ！前よりも腕がずっと上がってる！」

「当たり前だ、いつまでもヒョッコじゃいられないから……なッ！」

「よおねえちゃん。お嬢サマのくせに肉弾戦たあやるじゃねーか！」

「あなた達こそ、亀のくせに随分と身軽なのね。どんな減量したのかしら？」

「ワオ！ホンモノのメイドさんだ！
ねえねえ、記念に写真撮っていい？」

「えっ、写真ですか！？え、え〜とですねえ〜……」

「2人とも！そんなこと後にしなさい！」

「や、ミユキちゃん。理数系科目の調子はどうだい？」

「うっ！？」

ドナちゃんお願い！その話はヤメテ！！」

「このコト達、つつよい。」

03話「戦えることと戦うことは違う、って誰かが言ってたよね」

圧倒的な戦力差をものもしないどころか、フツーに会話しながらとかどんだけ余裕なんですか。

ミケランジェロなんて右手にヌンチャク、左手にカメラ……って
ワイ！

「シッ！」

「つつつつ！」

「アタア！！！」

「せいっ！」

レオナルドの峰打ちで

ラファエロの回し蹴りで
ミケランジェロのヌンチャクによる一撃で
ドナテロの棒の突きで

フットソルジャー達が次々KOされていく。

いや、タートルズが強いのは1ファンとしてよく知ってるけど……
……土郎さん達6人もまた、動きが凄まじい（一応、全員名前だけ
教えてもらいました）。

事実、パツと見ただけでも50人以上いたフットソルジャーが、
既に半分以下にまで減っているんだから。

まあ、土郎さん、恭也さん、美由希さんの高町家剣士3人がただ
者じゃないのは、最初のエンカウトでわかってたからさほど驚き
もしなかったけど………すずかちゃんのお姉さん、忍さんとそのメ
イド、ノエルさんとファリンさんが徒手空拳で立ち回り始めたのを
見た時やあ、思わず二度見しましたよええ。

そして、女性3人の拳と蹴りで大の男が悶絶する姿に本能的な恐
怖を覚えたよ……うん。

……オンナツテコワイ。

……つか誰だよ、メイドさん達の戦闘力皆無とか言ったの！

……俺だよ……！

で、そんな俺は何をしてるのかと言いつと……

「のおおおお!?!」

すずかちゃんのっ!壁っ!役っ!!

「お兄さん!!!」

「だっ大丈夫!この程度じゃ、ゲッターの装甲には傷1つ付かないから!」

今の俺は、横転した特殊車両(不意打ちが怖いので俺が倒した)を背に、すずかちゃんを守っている構図になっている。

「どけデカブツ!!!」

「どくかポケエ!!!」

「ぶっ!?!」

持ち前の装甲とゲッターアームの射程を頼りに、目標に群すすかちゃんがつてくるソルジャー共を千切っては投げ千切っては投げ……と、何とか持ちこたえている。

ガキの頃から続けてきた空手経験と、何よりゲッター3の性能のおかげで圧倒できているものの、正直、精神的余裕はまったく言っていないほどありません！

よくあの人達軽口叩きながら戦えるよね！

こっちは1秒でも早く終わらせようと必死ですよ！？

「ああもう！！ゲッターミサイルでいつそ一網打尽にできればどれだけ楽か」

無論、人殺しだけは避けたいから、何とかアームだけで頑張らな
いといけないんだけど……

「ん？」

一網打尽……。

一網、打尽……。

……
網あみ。

「あッ!！」

「えっ!?!」

その手があったか!

「ど、どうかしたんですか!?!」

「あ、ごめんすずかちゃん。

よし……皆さーんっ!!!」

驚かせたみたいだったんで、すずかちゃんに軽く謝る。
そしてすぐに、前方で戦う全員に呼びかける。

「どっした!?!」

向く。
土郎さんが真っ先に反応したのに続き、全員の意識がこちらへと

何となくだがそれを感じた俺は、大きく身を反らし、腹の底から
叫んだ。

「伏せろおお　　っ!!!」

叫ぶと同時に、両のゲッターアームを伸ばす!

渾身の力で、右に、左に、上に、下に、ひたすらに!!!

「「「!?!?!」」」

場を覆い尽くすように伸びる腕に、敵も味方もが驚愕する中、ゲッターアームは敵を1人、また1人と絡めとっていく。

そして、

「よいしょお!!!」

最終的には、20人強いたフトソルジャー全員が、がんじがらめのゲッターアームに、まとめて丸めて捕らえられ、宙に持ち上げ

られていた。

見た目はまさに、漁業用の網に捕らえられた小魚の群むれ！

「な、なんてデタラメな…」

「コレがホントの肉団子ミートボール…なんちゃって」

「ミケちゃんそれエグい！」

「う、コメン…」

高町兄弟とミケランジェロがなんか不吉なこと言ったけど…気にしない！

「さあ！ゲッター3の必殺技、見せてやる！！」

ゲッター3のパイロット1人目にして柔道の達人、“巴 武蔵”
が編み出した、決め手……。

これが、ゲッター3の真骨頂！！

「大・雪・山！！おろお

しッ！！！！！！」

がんじがらめの腕を勢いよくほどく！

捕らわれていたソルジャー達は、まるで竜巻にさらわれた木の葉のようにきりもみしながら宙を舞い

アームが元の長さに戻った時、地面のそこかしこに瀕死のソルジャー達が転がっていた。

「ハアー、ハアー、ハアー……………」

終わった…んだよ、な…？

荒く呼吸をしながら、周りをゆっくり見回すと、呆然とした様子の高町家、月村家、タートルズの姿が映った。

…良かった。

正直、巻き込んだらどうしようとか思ってたから。

……ハア、疲れた。

ゲッターへの変身が体力を食うのか、俺が精神的に参ってしまったのか、その両方か……。

とにかく、終わったんだ。

さっさとミューを出してやらないとな。

「ハッチ、オープン」

胸 イーグル号のコクピット部分のハッチを“開く”。

本物のゲッターとは違う仕組みになっているけど、それは俺が“改造”させたから。

「もう大丈夫。出ておいで、ミュー」

自分でもわかるぐらい、あからさまに疲労混じりの俺の声。

内心、情けねー…と思いつつ、待つこと数秒。

一匹のゴールデンハムスターがコクピットから恐る恐る這い出てきた。

「……健さん、ごめんなさい……」

「いや、俺こそごめんな。ミュー」

ハムスター……ミューは、つぶらな瞳で俺を見上げ、頭を下げてきた。

ネズミの化身と言うから、一般的な白いラットを想像していた俺だったが、その実はご覧の通りハムスターだったのだ。

その証拠に、俺を見上げ小さな体を更に縮み込ませているハムスターの頭には、人間の姿の時と同じアホ毛が一本立っている。

コクピットに入ってもらったのは、突入に際してミューを1人にするのがものすごく不安だったので、どうしようかと思案した末のアイデアだ。

これなら、俺がやられない限りミューは安全。

かつ、得意のサーチ能力でミューが俺のサポートをしてくれるので俺も助かり、まさに一石二鳥。

「私……いきなりミスしちゃいました……。しかも、それで何もできなくなつて……」。

健さんが……頼りにしてくれたのに……。大事な初陣、だったのに、に
い……！」

ハムスター姿なので表情はイマイチ読み取れないが、声音から既に泣きそうなのはよくわかる。

この作戦を話した時、ミューはかなり意気込んでいた。なまじ張り切っていただけに、失敗したショックが大きいんだと思う。

「いやいや、失敗したのは俺もいつ……しょ？」

「…え」

…アレ？おかしいな。

「健さん？」

視界がブレる。

腕が上がらない。

頭がハッキリしない。

「…健さん!？」

ブレる上に視界が揺れる

んにゃ、揺れてるのは上半身？

… 自覚してた以上に…… 限界だったらしいね、どーも…。

「一気にキタなあ……………」

「健さん！どうしたんですか！？健さん！健さんッ！！」

ぼやっとした頭で、目の前に女の子が現れたのをギリギリ認識する。

ああ、ミューが人型に戻ったのか……………。

俺の意識は、そこでブラックアウトした。

士郎 side

すずかちゃんが誘拐されたという連絡を受けた俺は、すぐに臨時休業の札を店頭に出し、月村家へと向かった。

月村の屋敷に着くと、ノエルとファリンが既に情報を集め、待機していた。

自分達の目指す彼方から、小さく聞こえた金属が破壊されるような音。

一気に緊張が高まる。

『何かが起こっている……！？急ぐぞ、みんな！』

『『『はい！』』』

そうしてたどり着いた先で俺達は……“彼”と出会った。

『ゲッターアームツ……！』

上から黄、赤、白という奇抜なデザインの戦闘マシン。
それが第一印象。

どこまでも伸びる腕。

刃を通さない堅牢な装甲。

不安定とはほぼ無縁のキヤタピラ走行。

厄介な相手 しかし、勝てない相手ではない、とそう感じた。

何故なら、その動きがあまりにも素人同然だったからだ。

見た所、格闘技を少々かじった程度。状況に戸惑い、力をがむしやらの振るうことしかできない……新兵どころか、完全に一般人の動き。

故に、解せなかった。

戦うために作られたであろう戦闘マシンが、何故こつても人間臭い？

しかし、愛刀を振りかざしながらの思考は、中断せざるを得なかった。

『やめてええ

ッ！！！！！』

救出目標のすずかちゃん、本人によって。

『おじさんも恭也さんも美由希さんも、もうやめて！その人は味方だよ！！』

人？

目の前のコレが、人間だというのか!?

『待ちなさいすずか! どういうことなの?』

『お兄さんは、ゲッター3さんは私を助けてくれたの! だからお願い、もうやめてお姉ちゃん!』

すずかちゃんはこの時に嘘をつくような子ではない。彼女の言っていることは真実なのだろう。

しかし、これで尚更わからなくなってしまった。

“彼”は何なのか? 一体、何者なのか

俺を含めた全員が目に見えて困惑し始めた時

ザザザザザザザザザザザザザザ!

俺達に気配すら気取らせず現れた、“敵”と“味方”。

『ッハア！！』

『オラよッ！』

『アチヨ！！』

『そらッ！！』

アメリカを中心に活動している巨大犯罪組織、フット団。

同じくアメリカ、ニューヨークの地下を隠れ家に、フット団やその他の犯罪組織、ギャングなどと人知れず戦う4人の亀忍者、ミュータントタートルズ。

状況が状況だが、彼らとの再会は純粹に喜ばしかった。恭也と美由希もきつと同じ思いだろう。

：ただ、ドナテロの言った通り、本当ならもっと穏やかな場で再会したかったが。

「成り行きだけど、加勢するぞ！シロウ！キョウヤ！ミユキ！」

そうこちらに呼びかけ、周囲に睨みを利かせるレオナルドの姿に、思わずほっとする。ここは既に戦場だというのに。

高町家にとって、タートルズの使用はそれほど大きい。

「ああ、助かる！お互い、詳しい話は後でも構わないかい？」

「もちろんさ、シロウ。まずはこいつらを倒す！
いいな、みんな！」

「ああ。飛行機の中じゃ延々座りっぱなしだったからな、体を解す
にゃ丁度いいぜ」

「ねえねえドナちゃん、アレってメイドさんだよな？アキハバラの
！ホラ、こないだテレビでやってたじゃん！」

「ミケランジェロ、今はそれどころじゃないと思うよ？
それに、アキハバラじゃなくてアキハバラだから」

「アレ、そだっけ？」

「…ミケランジェロ！ドナテロ！」

「うっ！？そ、そんなに怒らないでよレオちゃん、マジメにやる
からさ！ね、ドナちゃん！」

「っていうか、僕完全にとぼちりなんだけどなあ…」

「どうやら、各々の性格は相変わらずらしい。思わず微笑んでしまった。」

「彼らのその人柄…もとい、亀柄には俺だけじゃなく家族全員が助けられたものだ。」

とにかく、これで形勢は一気にこちらが有利になった。

もとより、幹部クラスのない雑兵のみの奴ら相手に、俺達が負ける可能性はまずない。

加えて、経験・実力共に折り紙付きの最精鋭4人が加わったのだから、むしろオーバーキルとすら言えるかもしれない。

…懸念があるとするれば、例の“彼”のことだ。

「おいシロウ、あつちの三色メカは何なんだ？敵に数えて構わねえんだよね？」

「いげっ!？」

タイミングがいいというべきか、ラファエロに睨まれた“彼”が、奇声を発しつつ大げさにのけぞっている。

…動きがいちいち緊張感に欠けていて、どうにも調子が狂うな。

確か、すずかちゃんは“ゲッター3”と呼んでいたが…。

「ちょっと待ってくれ、ラファエロ」

「あん？」

確証はないが、俺にはもう、“彼”のことを敵とは思えなかった。
だから、

「ゲッター3、だったね？時間がなから単刀直入に聞く。
君は、俺達の敵か？味方か？」

「……あ、いや敵じゃないです！全然味方です！」

うん、今はこれで充分だろう。

「…わかった。俺としても、君には聞きたいことがある。
俺は高町士郎。まずは、奴らを片付けるぞ！」

「は、はい！」

恭也や忍ちゃん、そしてラファエロが難色を示したが、

「何かあれば俺が責任を持つ」

そう説得し、渋々だが納得してもらった。

事実、もし“彼”がこちらに害意を向けば、その“瞬間”に切り捨てるつもりだった。

だからこそ、不慣れな動きの“彼”をフォローするように動いていた。

…しかしこの後、俺は認識の甘さを突きつけられることとなる。

「大・雪・山！！おろお

しッ！！！！！」

たった一撃。たったの一撃で、事態は早々に片が付いた。

残ったのは、周囲を埋め尽くす瀕死のフットソルジャー達と、連中の使っていた特殊車両。

そして…

「健さんしっかり！しっかりしてくださいよお！
イヤ、イヤ…健さん！健さあああん！！」

突如光に包まれ、少年の姿となり倒れた“彼”と、“彼”へ涙をこぼしながら呼びかけ続ける、小さな少女だった。

「っく」

04話「これ、いいの？大丈夫なの？」（前書き）

今回から、更新の仕方を変えようと思います

今までは、納得のいくところまで書いてから投稿してましたが、今回からは細かく話を区切って、更新効率を上げようと思います

でないと、いつまでも更新できないので…不甲斐ない

更新頻度は、1日〜3日おきを目標にしています

それでは、短めですが本編をどうぞ

04話「これ、いいの？大丈夫なの？」

「……………ん？」

アレ？

「……………んーと……………」

……………だあめだ、頭働かねえ……………。

「んああ……………」

呂律も回らないし、体だるいし、とにかく瞼が重い。

何せこの布団、暖かいし柔らかいしいいにおいがするしで正にパーフェクト。布団の魔力をこれでもか、って勢いで放出してきなさる。

ふはあ、至福……………。

「……………ん？」

……ちよつと待った。…布団？

俺、いつの間に寝たんだ？

…てか、寝る前なにしてたんだっけ……

……………デジャビユ？

「お目覚めですか？」

「……？」

…誰？

おっくつさを何とか我慢して、声がした方へ顔を向けて…

「…その様子ですと、まだ半覚醒のようですね」

「……………メイド？」

明るい紫色をしたショートカットのメイドさんが、いた。

「こちらが客間になります。皆様が中でお待ちです」

「あ、はい」

時刻は午後9時。

俺は今、月村家のメイド、ノエル・K・アーエリヒカイトさんの案内で、この家の客間（の中の一つ）の前に案内されたところだ。

フット団との戦闘の直後ぶっ倒れた俺を、この家…いや屋敷？に運び、客室のベッドに寝かせてくれたらしい。

コンコン、とノエルさんが控えめに扉を叩く。

…扉をノックするあの華奢な手が、フットソルジャーをノックアウトしていたのかと思うと、思わず頬が引きつる…が慌てて戻した。気づかれてないよね…？

「失礼致します。健様がお目覚めになりましたのでお連れしました」

『入ってもらって』

「かしこまりました」

中からの返答にノエルさんは内開きの扉をゆっくり押し開き、「どうぞお入りください」と俺を中へと促してくる。

「あ、どうもすみません…」

そつのない完璧なその所作に恐縮しつつ、室内へと足を踏み入れる。

「健さん！」

すると、部屋の様子を確認するよりも先に、小柄な女の子が頭のアンテナを揺らしながら駆け寄ってきた。

「ミューだ。なるほど、ここにいたのか。」

「だ、大丈夫ですか？痛いところとかありませんか！？」

「いや大丈夫だよ、おかげさまでね。」

「ごめんなミュー。心配かけた」

「いえそんな!…でも、本当に良かった。健さんが無事で…」

と、俺を見上げるミューは心底安心した様子で、ニコツと笑った。

なにこのかわいい生き物。撫でくり回しちやる。

「あ…」

「いやホントミューはええ子やなー。うりうり」

「そ、そんな…あうー…」

「…そろそろいいかしら?」

「え?」

撫でコマンドを実行したら、明らかにミューとは違う声が聞こえた。

あ、いけね。

「す、すみません。つい…」

ついついミューの相手をするのに夢中になってしまった。

べ、別に忘れてたわけじゃないんだからね!?

なんて言い訳を脳内でのたまいつつ、ミューを見下ろしてた視線を上げれば、向かい合って設置されたソファアに4人。

士郎さん、恭也さん、忍さん、そして…

「ホッホッホッ、なに構わんよ。仲良きことは良いことじゃ」

「スプツ!？」

「? どうかしたのかね」

「イエなんでもありません!!」

思わず叫びそうになったけど許してくだささい!!

「おつといかん、儂^{わし}だけ自己紹介がまだじゃったな」

イエイエそんなもんいりませんよ。

茶色い麻の着物…いやどっちかっていうと作務衣^{さむえ}か?
それを着込んだシルエツトは基本ヒトのそれだが、しかし絶対に

ヒトではないことは一目瞭然だ。

全身は灰色の体毛で覆われ、腰からは1m以上はありそうな尻尾が伸びており、体とは対照的に肌色の素肌が剥き出しになっている。

尖った鼻に、縦長に裂けた口。そして三角に立った耳……………

「僕はスプリンターという。見ての通りの老鼠じゃよ」

「は、はじめまして。清白 健です…！」

そう、タートルズの師匠にして育ての父。

タートルズ
息子達に厳しくも深い愛を注ぐネズミのミュータント、スプリンター先生である！

…と、いうことは昼間会ったタートルズは原作準拠の平成版仕様か。

平成版と昭和版って、色々と設定が違っただよね。

「疲れてるところすまないね、清白君。さ、立ったままというのも何だし、そこに掛けてくれ。ミューちゃんはその隣だ」

「は、はいっ」

「わかりました…」

土郎さんに促されるまま、俺、ミューの順で三人掛けソファーに

腰掛ける。

…座り心地からして、きつとゾツとするような値段なんだろうーな
あ。

ちなみに構図としては、

ソファ1

・奥、恭也さん

・中、忍さん

・手前、士郎さん

ソファ2

・奥、スプリンター先生

・中、俺

・手前、ミュー

という感じで、俺と忍さんが向かい合う形だ。

…尋問ですわかります。

「さて…戦闘中は随分と慌ただしかったし、改めて自己紹介させて
もらうわね。」

私は月村 忍。すずかの姉よ。

今日は妹を助けてくれて、本当にありがとう」

「い、いや！俺は別に…」

頭を下げてくる忍さんにアタフタしてしまっ。

助けた動機のメインが“ゲッターの力を試したかったから”なんて、口が裂けても言えない…。

「夕方の連中とか、何故妹が狙われたのか……気になるでしょう？」

「ええ、まあ」

何やら言い知れない余裕を感じさせる微笑みを浮かべる忍さんに、素直に頷く。

前者は原作知識があるからともかく、後者が気になるのは事実。

女の子1人を誘拐するためには、はっきり言ってあの戦力は異常だ。

「そのあたりの事情とか、こちらの素性をあなたに話すのは別にやぶさかじゃないわ。

…ただ、その前に“確認”したいことがあるの」

きた！

「確認…ですか」

さっそくきたよ尋問フェイズ！

まああんな人外じみたマネ目の前でしてみせて、言及されないワケないよねー。

変身解けるところも見られただろうし…。

「あなたが寝てる間に、事情はあらかたミューちゃんから聞いたわ」

「はあ…」

うーんっと、はたしてどこまで話すべきなのか……。

こういうのって大体“秘密にしておいてクライマックス前後で暴露”がセオリーだよな？

「…正直、信憑性のかけらもない内容だったけど、ミューちゃんが嘘をついてるようには見えなかったし、そういう駆け引きができると思えないのよね」

……よし、ちょっと待とう。

「すみません忍さん、ちょっといいですか？」

「別にいいわよ」

「ありがとうございます。」

…あのさ、ミュー」

忍さんに断ってから、左隣のミューへ首を90°回す。

「は、はい。何ですか？」

「いや、あらかたつてさ……どっからどこまで話したの？」

「え？えつとですね……」

健さんが私に巻き込まれて一度死んでしまった所から、すずかさんを助けたところまでです」

「オウ……」

それってつまり……

「その、助けて下さった忍さんや土郎さん達に隠し事をするのはい

けないと思って……駄目、でしたか？」

「いや、えと……駄目ってゆーか……」

「清白君」

不意に名前を呼ばれ首を戻せば、さっきまでの微笑みを消した、威圧感すら感じる真剣^{マツ}顔の忍さんが。

「ひとつずつ、確認をとらせてもらっわ」

つまり、ミューは最初から最後まで全部話した、ってことで……

「あなたが生き返ったこと、あなたが違う世界からきたこと。そして、神から受け取ったっていう力の^{ゲッター}こと……全てについて」

「……ハイ、ワカリマシタ」

即バレワロタ〜(^^)(^^)ノ

「いやいや、なかなか良い気迫を持ったお嬢さんじゃのう」

「ええ、本当に。恭也にはもったいないくらいですよ」

「……………」

「…づん？どうかしたのかね、キョウヤ」

「……………いえ、何でもありません。先生」

05話「辛い事件から始まった、大好きな家族なの」(前書き)

難産でした……

高町家とタートルズの関係性は、今作ではとても重要なものになっています

主に、なのはの精神面に関して

それでは、本編をどうぞ

05話「辛い事件から始まった、大好きな家族なの」

時間は少し遡り、同日午後8時、高町家

「なのは、これお願いね」

「はい！」

みなさんこんばんは！私、高町なのはです！

ただいま、お母さんと一緒に晩御飯の準備中です

いつもより遅めの時間だけど、仕方ないよね。

だって、すずかちゃんが誘拐されちゃったんだから。

「ほんと、すずかちゃんが無事でよかったあ……」

お母さんに手渡された唐揚げの皿をテーブルに置いてから、ふうと息をつく。

そういえばこのセリフも、もう何回目だろ？

目の前ですずかちゃんさがさらわれてから、それぞれ迎えにきてもらって帰った私とアリサちゃん。

お母さんは何度も何度も「大丈夫よ。お父さんたちが助けに行っただから」って言うてくれたけど、不安な気持ちは全然収まらなくて…

それだけに、お父さんから「すずかちゃんは無事だよ」って電話がきた時は、泣いちゃいそうだった…というか、ほんとに泣いちゃったの。

「あ、そういえば…」

改めて、テーブルの上を見渡す。

肉類や揚げ物、ポリウム多めのお料理と、同じぐらいにたくさんサラダが、テーブルいっぱいに並んでる。

それは、私たち高町家5人で食べきるにはちょっと多くて…

しかも、

「お母さん！お父さんとお兄ちゃんて、帰り遅いんだよねー？」

「そうよー。美由希はそろそろ帰ってくるはずだけどー」

ジュージュー音がする台所に呼びかけると、お母さんが同じように返してくれた。

ということは、お客さんが来るのかな？

「でも…」

すずかちゃんが大変な目にあっただばかりなのに……

「ただいまー！」

と、玄関から戸が開く音と、お姉ちゃんの声。

ちょうど考えてたタイミングで帰ってきたの。
こづいづのを、ウワサをすれば……何だっけ？

「なのは、お出迎えしてあげて」

「はいー！」

とにかく、お姉ちゃんを出迎えるために玄関に向かいます！

すずかちゃんを助けてくれてありがとう、ってお礼言わなきゃ。

「お姉ちゃんおかえりなさ…」

そこまで言いかけて、

「い…？」

その場で、固まっちゃった。

ニコニコ笑顔なお姉ちゃんの後ろには、もう春なのに茶色いロン
グコートとハットで全身をすっぽり覆った4人。

よその人が見たら絶対怪しい人に見えると思うの。

…でも、私にとっては“見慣れた変装”で、

私の大好きな人たちの格好で、

つまりどついうことかって言つと……

「みんな！おかえりなさい！」

『ただいま、ナノハ（ナノちゃん）！』

遠いアメリカから、大好きな家族タイトルスのみんなが帰ってきたんです！

四年前

N o s i d e

高町家の主にして、喫茶翠屋マスター、高町士郎は、かつて裏社

会に片足を突っ込んで生きていた。

御神流……

音すら捉える、神速の剣。

これを修めていた彼は、その人並み外れた身体能力と剣術を生かし、SPの仕事を勤めていた。

そんな中、事件は起きた。

4年前、とある異国のホテル。

士郎が護衛していた少女へ、何者かが襲撃。

特徴的な装束を揃って身にまとい襲い来る襲撃者達を次々斬り伏せる士郎だったが……

「御神流の使い手に出くわすとはとんだ誤算だった……が、所詮は人間。

不意に弱みを突いてやれば、クク…脆いものだ」

「ぐ……が……」

「あ…あ…！」

少女を庇い、深手を負ってしまつ。

「とどめだ

」
「でやあッ…！」

又ウ！？

薄れゆく意識の中、彼が目にしたのは

「おのれキサマら…こんなところまで！」

「ハッ！テメエに好き勝手させとくと、じんましんが出るんだよ

」
「シュレツダー…オマエの好きにはさせない！」

自身の血で濡れたかぎづめをつけた鎧甲よろいかぶとと、それに立ちはだかる、
4つの甲羅であった。

高町士郎、入院。意識不明の重傷。

士郎の妻、高町桃子以下高町家の面々は、翠屋の経営が軌道に乗り始めた矢先のこの凶事に、肉体的、また精神的にも厳しい日々を強いられていた。

この非常事態を何とか切り抜けようと奮闘する中、5人の異形が高町家へ来訪してきた。

そう、レオナルド、ラファエロ、ドナテロ、ミケランジェロのトトルズ4人とその師、スプリンターである。

奇天烈な来訪者に戸惑う高町家だったが、しかし彼らから告げられたのは、士郎が倒れるに至った真相であった。

士郎は護衛していた少女を庇い、負傷したこと。

犯人は犯罪組織フット団首領、シュレッダー……自分達の宿敵であること。

そして、シュレッダーを追いホテルに侵入したものの、一歩間に合わず、士郎に重傷を負わせてしまったこと……

「俺達の力が及ばなかったばかりに、守るもののある彼に、怪我を負わせてしまった」

「だから、僕達であなた達の手助けをしたいんです」

「罪滅ぼし、ってワケでもねえが、ちつとばかり目覚めが悪くってな」

「そうそう。ちっちゃい子もいるって聞いて、オイラもういてもたつてもいられなくって！」

「我々の宿命に、あなた方一家を巻き込んでしまった。どうか受け入れてはくださらんか」

この申し出に、長男の恭也が強く難色を示し、タートルズに対し敵意さえ向けた。

しかし、

「…わかりました。是非お願いします」

「母さん!?!」

桃子はこれを承諾した。

「恭也。気持ちはわかるけど、今うち猫の手も借りたい状況なの」
「でも！」

「それに、今の話が本当なら、この人達は士郎さんの命の恩人よ。
無下になんてできないわ」

「ッ……！」

「恭ちゃん……」

「おにいちゃん……」

かくして、高町家とタートルズの共同生活が始まった。

「ドナテロ君、シューにクリームを詰めてくれる？」

「了解です」

手先の器用なドナテロは、翠屋厨房にて桃子の補佐を。

「あゝもうラファエロ！食器はもって丁寧に扱わないとっ」

「…すまねえ」

ラファエロもまた、皿洗いや清掃、その他雑務をこなして（？）いた。

「よし、風呂掃除完了。」

ミケランジェロ、そっちはどうだ？」

レオナルド、ミケランジェロの2人は高町家に残り、慣れない家事に悪戦苦闘。

しかし、そこはリーダー格のレオナルド。一週間も経つ頃には全ての作業手順を把握していた。

しかし、ミケランジェロはといえば、

「ウガー！たぐべぐちゃぐつぞぞー！！」

「きゃ〜っ
」

「…はあ、まったく」

タートルズの中でも最も精神年齢の低く、かつ遊ぶの大好きなミケランジェロが面倒な家事に集中できるわけもなく、なし崩し的なのは遊び相手ポジションに収まっていた。

そしてプリンターは……………

「ハアツ…ハアツ…ハアツ…」

高町家の敷地内に建てられている、小さな道場。

その中で、汗だくの恭也が四つん這いで息を荒げていた。

そんな彼の前には、茶色の作務衣を着たスプリンターが、右手で杖について静かに佇んでいる。

「ここまでにしておくのじゃ、キョウヤ殿。このまま続ければ、おぬしの体がまいってしまっぞ」

「まだっ…です……」

スプリンターの忠告も聞かず、恭也は自身に鞭打ち立ち上がる。

そんな彼を、スプリンターは構えもとらずただ見つめる。真正面から、ただじつと。

「…今のおぬしでは、儂に一撃とて入れられんよ」

「…!」

「ここ数日の鍛錬は、おぬしの限界を超えておる。休むこともまた、戦士の仕事というものじゃ」

「休む暇など…ありません!」

怒声と共に、恭也は踏み込み、木刀を袈裟懸けに振るう。
常人ならあつという間もなく意識を狩られるであろう一振りは、
しかし難なくかわされてしまふ。

「貴様に、部外者の貴様らに何がわかる!？」

俺は長男だ!父さんがいない今、俺がこの手で守らないといけない
んだ!家を!家族を!!」

叫びながら剣を振るう恭也だが、それが相手を捉えることはない。

身体をひねり、かがめ、時に跳び、杖でいなす。恭也の猛攻を、
スプリンターは巧みにかわしていく。

それでも、止まらない。

否、止まらないのだ。彼は。

「そのためには実力ちからがいるんだ!!誰にも負けない

」

家族の幸せを守る力が。

スプリンターが口を開く。

「昨日、3時のおやつの時じゃったな。ナノハちゃんがこんなことを言っておったよ」

「…？」

やさしいおにいちゃんに、もどってほしいの……

「……！」

目を見開き、恭也は愕然とする。

もどってほしい、とはどついでいひとか。

なぜ、そんなことを言うのか。

前の自分とは、一体どういうことなのか。

今の自分^{おれ}は、一体なんだ？

「俺は………おれ、は……」

「家族を守ろうとする心意気、その心意気やよし。
じゃが、今おぬしが進んでいる道の行き先に、あるのは、おぬし自
身の破滅。そして……」

157

おぬしの不幸に嘆く、守るべき家族^{ものたち}の姿じゃ」

「だまれええええええ！！」

恭也が床を蹴る。

振り下ろされる木刀がスプリンターの脳天に迫り、

「…馬鹿者め」

「がっ……………」

瞬間、恭也の意識はブラックアウトした。

鳩尾にめりこむ、杖の硬い感触を感じながら。

恭也 side

目覚めると、周りには皆がいた。

「おにいちゃん…！」

「恭ちゃん…！」

「ぐぼっ…！？」

直後、美由希となのはに抱きつかれ、危うく二度寝かけたが、泣いている2人に文句を言うことなどできなかった。

…泣いている？

すると、母さんに2人ごと抱かれた。

2人とは違い、ゆっくり包むように。

もう何年ぶりになるかわからない、母さんの温もり。

寝起きのためか、つい惚ける俺の耳元で、母さんが呟く。

「じめんなさい」と…

結局俺には、何も見えていなかったのだ。

家族どころか、俺自身さえも。

父さんが守ってきた家族を、俺は守ろうとしてきた。

でも、俺は勘違いしていた。

父さんは、母さんや妹たちだけじゃない、“俺も”守っていたんだ。

俺のしていたことは、結局ただの独りよがりでしかなかった。

それが情けないやら、悔しいやら、腹立たしいやら……

涙が止まらなかった。

「一件落着、だな」

「それにしても、キョウヤってばホント頑固だよねー」

「まったくだぜ。あの石頭っぷりは、どっかの誰かさんにそっくりだ」

「…悪かったな、頑固な石頭で」

「まあまあ」

固まるようにして泣き続ける俺達を、タートルズが遠巻きに眺めている。

「これ息子たち。家族の感動シーンに水を差すでない。そういうのを、KYと言っくんじゃ」

「先生、そのセリフがすでにKYです…」

あいつらだって、殺伐とした裏の世界に生きる存在だ。ましてや、人間ですらない。

なのに、そんなことなんの苦でもないかのように、笑ってる。

下手すれば、そこらを歩く一般人より、よっぽど人間らしい。

「みんな、どうもありがとう。」

あなた達がいなかったら恭也は、私たちは取り返しのつかないことになっていたかもしれない」

「いえ、俺達は大したことはしてませんよ」

礼を述べる母さんに、レオナルドが首を振る。

しかし実際、彼らが現れなければどうなっていただろう。

母さんや美由希が過労で倒れたかもしれない。

俺が無茶な鍛錬で自滅したかもしれない。

まだ小さいのはに、寂しい思いをさせることになったかもしれない。

…頭が冷えた今、冷静に考えるとゾツとする。

「ラファちゃんなんて、お皿ガツチャンガツチャン割ってたしね」

「ミケちゃんはね、なのはとずーっといっしょにあそんでくれたの！」

「テメエ遊んでばっかだったんじゃないか！！」

「あいてっ！？」

今度はラファエロとミケランジェロがいきなりどつき漫才を始める。

ドナテロ曰わく、いつものことらしい。

「…びっ」

「ふふふ…」

「あはははっ！」

「ホッホッホッ」

1人、また1人ところえきれずに笑い出す。

さつきまで嗚咽が聞こえていた室内は、いつのまにか全員の笑い声でいっぱいになっていた。

「それじゃあ、ひとつ、」

「シロウさんの回復も祈って、」

「お手を拝借。」

…ニホンじゃこう言うんだってな」

「ナノハちゃんはオイラのところおいでー」

タートルズに促されるまま、全員が円形になり、右手を中央へ上げる。ハイタッチの格好だ。

なのはは、ミケランジェロに抱えられて手を伸ばしている。

そして彼らお決まりのセリフを教えられた俺達は、「せーの」で
頭上の手を合わせた。

『カワバンガ!! (やったぜ最高!!)』

不思議な連中だ。本当に……。

06話「衣食住で言葉を作った人をちよつと尊敬した。知らないけど」(前書き)

ギブミー文章力

06話「衣食住で言葉を作った人をちょっと尊敬した。知らないけど」

どうも1話ぶり、ネタバレの早さが著しい転生者（笑）、清白
健です。

「…聞けば聞くほど胡散臭い話ね。ここまできるといつそ清々しい
わ」

「ですよー」…」

ゲロりました。

包み隠さず、もう胃袋から大腸の裏側までベロリと（キタナイ）。

「でもまあ、あなたが嘘をついてないのはわかるわ。
これでも、人を見る目はあるつもりだし」

「はは…ありがとうございます」

苦笑しつつ、ホッと息を漏らす。

真正面からこつちを見定めるようににして、質問され続けた。
正直、病み上がりの俺には色んな意味でキツかった。
が、逆に、年も大して変わらないのにあそこまでの貫禄の持った
忍さんは大物なんだと思う。

「それじゃあ忍ちゃん、もういいのかい？」

「はい。色々腑に落ちない所はありますけど、この子達を賣めても
仕方ありませんし。」

おじさまこそ、よろしいんですか？」

「俺かい？」

逆に問い返され、土郎さんは「うん…」と顎に手をあてる。

…え？夜はまだ長い感じですか？

「……いや、俺も忍ちゃんと同意見だよ。
少なくとも、彼ら自身にやましいものはないよ」

…あれ？意外とアツサリ合格もらえた？

「僕も同感じゃ。

この者たちから、邪悪な意思是感じとれぬからの」

せ、先生！

あ、ヤバい。土郎さんより数倍嬉しい……

ってイヤイヤイヤ、不謹慎だろ！

「それに、」

なんてこと考えてると、先生はおもむろに立ち上がり、なぜか俺とミユウの背後へ。

「こんなにも純真な子と、その子が信頼する彼を、邪険にはできぬからのう。ホッホッホッ」

そう言って茶目っぽく笑う先生は、毛でフワフワした両手で俺達

の頭を撫でてきた。

『あ、ありがとうございます……』

まあこっちは嬉しいやら気恥ずかしいやら。

そついや03年版の先生は結構お茶目なんだった。

なんせ頭撫でられるなんて4、5年ぶりだし、相手はあのスプリンター先生。ヒヤッホウしそつになるのをこらえるので精一杯です。すいませんね、ミーハーで。

ミューはミューでまんざらでもなさそうだが……よく考えたらこの子のほづが年上なんじゃなかるうか。

「恭也、あなたはどつ？」

「……父さんや先生がそつ言うなら、間違いはないんだろつ」

最後は恭也さん、なんだけど……台詞とは裏腹に、眉間に皺が寄ってらっしやいます。

この人、俺に対して常に警戒体制で、忍さんからの尋問を受けて

る間も常にこつちを睨んできていた。

あ、視線がミューに移った。やめてくださいよこの子怖がりなんだから。

「俺だってこの2人が悪人だなんて思っただけさ。ただ、問題はそこじゃない」

…ん？ああ、なるほど。そういう話しか。

「2人の力、特に清白くんの力は強大だ。2人にその気がなくても、それがいつどこでどんな形で利用されるかわからない。フット団のこともあるし、2人を放置するのは危険だと思っ」

「…はい、それは俺も思います」

心配はない、とは言いきれない。

ゲッターの力は俺の意思がないと働かない。でも、そんなものは薬でも何でも使えばどうとでもなるだろう。フット団ならそれくらい躊躇なくやるはずだ。

「なので、俺から忍さんに提案…というか、お願いがあります」

「私に？」

実を言えば、今までの話の中で話そうとは決めてたんだけど、話がこつという流れになったのなら好都合。

「俺達をこの家で働かせてくれませんか。住み込みで」

「了承」

「はやッ!？」

即決!？

しかもそんな涼しい顔で…って言うかそれ違う人!

「あら、どうかしたの？」

「いやっ、トントン拍子にも限度ってもんがあるんじゃないかと思
いまして…」

「…忍。お前、初めからこのつもりだったんだろ」

「ええ、そうよ」

溜め息混じりに言う恭也さんだが、対して忍さんはしれっとして
いる。

どうも、俺は良くも悪くも忍さんの手のひらの上だったらしい。

「恭也が言う危険性は百も承知よ。」

なら、私達で2人を守ってあげればいいだけよ。それも身近でね」

「そうか、2人には身寄りも住む場所もないんだっただな」

土郎さんの言う通り、俺達には金、住处、戸籍と生活に最低限必
要なものがまったく揃ってない。

だからこそ、この期を生かして月村家に上がり込もうとしたわけだ。

「私達はあなた達という戦力を手に入れ、あなた達は安定した衣食住を手に入れる。

あなたが開示しようとしたのは、こんな所じゃないかしら」

「はい、その通りです。

世界が変わったって、ギブ&テイクは基本でしょうから」

「ふふ、わかってるじゃない」

そう言って悪戯っぽく笑う忍さん。

……綺麗なんだけど、底が見えません。

女性って、コワイ。

「……………」

「え、えっと……………。何で私を、そ、そんなジツと見つめて……………」

「いや、ちょっと祈っておこうかと思って」

「…ふうん。何をそんな熱心に祈ってるのかしら？」

「超ごめんなさい」

「?????」

「ホッホッホッホッ」

どうかミューは純真無垢そのまがで育ちますように……。

そんなこんなで月村家への奉公が決まった俺達だったが、「次は私達の番ね」と向こうの事情を含めた事件のあらましを聞くことになった。

スプリンター先生からターゲットルズの素性についても話されたが、今は省こう。土郎さんちとの関係以外はほぼ原作通りだったし。

問題なのは“夜の一族”だ。

「夜の一族……」。

身体能力や治癒力において常人をはるかに凌駕する。

しかし、定期的に血液を摂取する必要があり、激しい吸血衝動が起
こることもある。

それ以外の特異性は別段無く、日光も銀もにんにくもなすびも平気
……」

そう。忍さんとすずかちゃんは、純然たる人間じゃなく、吸血鬼
だったのだ

「……って話を聞いてきたんだけども」

「あの、なすびなんて話の中に取りましたっけ？」

「いや、単に俺がナス嫌いなだけ」

まったく、なぜナスは火を通すとああもフニャフニャになるのか。解せぬ。

「…全部、知られちゃったんですね」

「あ、スルーされた」

現在地、月村邸すずか私室。

月村家の秘密“夜の一族”についての話が終わり、あの場はお開きとなった。

ただ、今後この家で生活するのに必須な事項があったので、俺とミユーはすずかちゃんの部屋を訪れた。

時間が時間な上、シヨツキングなことがあった後だしもう寝てるかとも思ったけど、逆に寝付けないでいたらしい。

「でね…」

「…っ」

俺が口を開いた瞬間、すずかちゃんは唇をきゅっと噛む。

「何で“夜の一族”って名前になったんだろね」

「へっ？」

ふと思った素朴な疑問。

ただ、すずかちゃんにとっては予想外だったらしく口をポカンとあけっぱにして呆けてる。

「忍さんもすずかちゃんもさ、別に夜行性でわけじゃないじゃん？
夜は普通に寝るんでしょ？」

「は、はい」

「でしょ。じゃ、なーんで夜なのさ、って話。
昼間でも余裕…ってか一般人よりハイスペックだし、別段夜になっ
てなんか覚醒するわけでもないし、“血を吸いたい”って変な嗜好
持つてるだけのただの人間じゃん」

「ただの……人間？」

「えと。やっぱり、吸血鬼」夜だからなんじゃないですか？」

「まあ十中八九そうなんだろうけど、安直じゃない？」

それなら“吸血一族”でいいんじゃない？わかりやすいし、本質表してるし」

「なんか怖いですよそれえ……」

「…あのっ!」

すずかちゃんの声のトーンがちょっと上がったので、「この話はここまでする。」

「あ、ごめん。ほったらかしにしちゃったね」

「いえ、それはいいんです。それよりも……」

と、そこで言葉が切れる。

いざ切り出そうとは決めたものの、まだギリギリふんぎりがつかないらしい。

やれやれ。

「ぶっちゃんけ、ぶっでまいる」

「え？」

先手を打ってやったら案の定、すずかちゃんはさっき以上に呆気にとられたようだった。

鳩が豆鉄砲をくらったような顔、ってのはこういうことなんだろう。

そこまで意外だったんかね。だとすればちょっと物悲しい。

「あ、言っとくけどすずかちゃんがどうでもいいんじゃないからね？夜の一族云々が、ってのがどうでもいい…っていうか、こたわるのがめんどくさい」

「めんど…。で、でも！私は普通の人間じゃ……」

「いやいやいやいや、普通でしょ。むしろ普通の子より優しい良い子よ君は」

士郎さん達とやりあうハメになったあの時、すずかちゃんは必死に俺を庇ってくれた。

自分だって解放されたばかりで怖かったろうに。
うん。あれは感動した

「えと、その……………わ、私が怖くないんですか？」

「怖くもないし、不気味でもないよ。ねえ？」

「はい、もちろんです」

「な、何でそんなあっさり……………」

どうも悲壮感より困惑が勝っているようで、すずかちゃんの暗さが薄らいできた。

今までの会話と忍さんから聞いた話でわかったことだが、すずかちゃんは夜の一族であることに凄まじい劣等感を抱いている。

余計なお世話かもしれないが、身近で生活することになった以上、何とかしてあげたい。

なので、

「誓うって決めたんだよ。一生変わらない友情、つてのをさ」

「!?!」

夜の一族の秘密を知った者には、3つの選択肢がある。

ひとつ、夜の一族に関する記憶を消す（怖かったので方法は聞かなかった）。

ふたつ、一族の者を生涯の伴侶とし、一生添い遂げることを誓うこと。

みっつ、夜の一族と生涯変わらぬ友情を誓うこと。

「そ、それって…」

「まあ、本当はこういう形式だったやり方は好きじゃないんだけど」

「えへへ…。ちょっと照れくさいですね」

頭をかく俺と、はにかむミユー！。

そんな俺達を映すすすかちゃんの瞳は、どこか潤んでいた。

「俺、清白 健と」

「私、ミユーは」

『月村すすかとの変わらぬ友情を、ここに誓います』

「…ぐすっ」

すすかちゃんの目から、涙が零れる。

一滴、二滴。ポロポロと。

「あらら」

「え？あれっ！？あっあの、私何か間違えました!？」

「いや君が慌ててどーすんの」

和み担当なミューに苦笑しつつ、すずかちゃんの頭にゆっくり手をのせる。

「とうわけなんだけど、いいかな？」

「ぐす……はい」

自分で涙を拭いたすずかちゃんと目が合う。

どこか気恥ずかしそうで、でも嬉しそうで、とても幸せそうなの……

「よろしくお願いします！」

そんな笑顔。

“この笑顔を守りたい”

ふと、そんな風に思った転生一日目の夜だった。

「まあ吸血鬼って言っても、転生とか神様に比べりゃあねえ」

「転生？神様？」

「あの、すずかちゃんにはまだ私達のこと話してないんですけど…」

「アレ？」

07話「限界バトル叩きつけられて燃え尽きそうです」（前書き）

予想より長くなったけど、個人的には満足の仕上がり。

やっぱり違う作品のキャラ同士の日常的会話は楽しいなあ。

「だ、だってだってえ…健さんのクチからお餅みたいなのが…にゅふふふふっ」

モチっつーか、エクトプラズム魂的なナニかだと思う。

「その、私なら大丈夫だから、家で寝ててもいいよ？」

「いや…、フット団の動きも掴めてないから油断はできないし、—
応コレが今の俺の本職だし……」

さて、何となく伝わったとは思いますが、俺、超グロッキーです。

何がどうしてどうなってこんなことになってるのか。…最近の俺の日常を説明させてほしい。

4月のとある平日の場合

14:30

起床

「おそよづいぬいませーす」

「はい、おそよづいぬいます。健くん、サンドイッチできてますよ

」

「あ、ありがとうございます」

月村家にきてから、俺は昼夜逆転した日々を過ごしている。

それには事情があるのだが、まあ話が進めばわかるので今は割愛しよう。

とにかくそんなわけで、ファリンさんが用意してくれた軽めのブランチ(?)に舌鼓を打つ。

「そついでば、ミューとノエルさんは？」

ちなみにこの時間帯、忍さんは基本的に大学、すずかは小学校だ。

そして、ミューはノエルさん指導の下、メイド見習いとして慣れない家事の数々と日々格闘している。

格闘というよりは悪戦苦闘と言ったほうが正しいんだろうけど、それでも新鮮な驚きと発見の連続で、毎日が楽しくて仕方ないらしい。

「ミューちゃんにはおつかいに行ってもらってます。ノエルさんは、えと……………撮影です」

「またですか…」

メイド見習いというからには、そのユニフォームは当然メイド服だ。

フリルが散りばめられたメイド服を着込み、嬉しさ半分、恥ずかしさ半分といったはにかみ顔でクルツと回ったミューに、俺を含む月村家の住民全員ノックアウトされたのは記憶に新しい。

で、そのあまりのキュートさに、忍さんはノエルさんにミューの日々を記録するよう指示。

ノエルさんは嬉々として（表情には出ないけども）カメラのシャッターを押すのだった。

「だ〜れにも〜内緒で〜……ってか」

考えてみれば、ミューはこれがはじめてのおつかい。
きつと、今この瞬間のノエルさんは絶好調なんだろうなあ。

「あはは……。あ、コーヒーのおかわりいります?」

「あ、お願いします」

「はい」

空になったカップに黒い液体が注がれ、芳醇な香りが鼻をくすぐる。

「コーヒーの知識なんざ無いに等しい俺でも、これが高級品こいせいのなのがよくわかる。さすが月村家。」

ちなみに、砂糖とミルクは少量ずつが好み。

でもカフェオレも好きだから、たまに両方とも多めに入れたりするが。

そうしてコーヒーを飲み干し、時計をみれば短針が3を指そうかというところだった。

「んじゃあ、俺はそろそろいきますね」

「はい、いってらっしゃい」

「いってきまーす」

胸の前で小さく手を振るファリンさんに見送られ、食堂を出る。

さて、今日も頑張っていけますか。

「にゃあー」

「にー」

「みゃーお」

「ッ……」

意気込んだそばから月村家のネコ達が数匹、構ってオーラを纏って現れたが……何とか振り切った。

とりあえず、月村家はぬこ達の楽園であることを追記しておく。

ああ、一度でいいから大量のぬこに埋もれてみたい……。

ぬっこぬっこぬっこぬこ。

15:30 　　すずか護衛

すずかのボディガード。それが俺の仕事だ。

…というか、それ以外仕事がなかった。

家事手伝いという手もあったが、そっちはミューがいるし、そもそも昼間寝ているのでほぼ役に立たない。乾いた洗濯物を取り込むのがせいぜいだ。

月村家の警備員とかどうだろう？

…ただでさえ特殊な家柄の月村家（というか忍さん）がセキュリティを怠るはずもなく、俺が加わる必要性がなかった。

アレはもうちょっとした要塞レベルだ。恐るべし、月村重工……。

そんなわけで、俺はさすがの護衛役ポジション収まることになった。

護衛をする上で重要になるさすががフット団に狙われた理由だけど、さすがが聞いたフットソルジャーの会話の内容や、彼女同様かそれ以上のご令嬢なアリサちゃんが一緒にいたのに狙われなかったことから、金ではなく夜の一族の“体そのもの”が目的だったのだろう。…というのが忍さん達の見解だった。

人体実験でもするつもりだったのか、怪人でも作る気だったのか…。

ちなみにあの時突然ソルジャー達がごっそり現れたのは、忍さん達が助けにくるのを見越した伏兵だったんだろうと考えられている。

さすがと一緒に忍さんも手に入れ、あわよくば士郎さん達御神流を一網打尽にしようとしたらしい。

いや、甘く見過ぎだろシュレッダー…。

長いモノローグはこのくらいにして、今俺が立ってるのは聖祥付属小学校の校門前。

そう、出待ちだ。

「お兄ちゃん！」

「お、すずか。お疲れー」

「うん、お疲れさまでーす」

「お疲れさまでーす！」

「お疲れさまでーす…」

「うん、なのはちゃんもアリサちゃんもお疲れ。

…うん？アリサちゃんどうかした？何か機嫌悪そうだけど」

「何でもないです！」

昇降口の方から小走りで駆けてきた仲良しトリオに軽く手を上げて挨拶する。ちなみにこの「お疲れ」は別段仕込んだわけでもなく単に3人が俺のマネをしただけ…

…ん？問題はそこじゃない？なんでさっきからすずか呼び捨てしてるんだ？お兄ちゃんてどういうことだ？

いやホラ、一緒に住む以上ミューは呼び捨てですずかはちゃん付けてのも何か変じゃん。

でもって「砕けた呼び名でOK」ってすずかに言ったら「…じゃあ、お兄ちゃんて呼んでいいですか？」ってなって………なによその目は。

「えっと、今日は何もないんだっけ？」

「うん。だから、なのはちゃんちで遊ぶことになったんだ」

「ん、わかった。いつものように俺もついていくことになるけど構わ

『ぜんぜんOKー』

聞くだけ無駄だったわな」

3人は塾やヴァイオリンのお稽古（なのはちゃんを除く）に通っているため、毎日というわけにもいかないが、何も無い放課後は基本この3人で遊んでいる。

最近ではその輪にタートルズやミューも加わるようになり、ずかの護衛の俺もまた一緒にさせてもらっているのだ。

もちろんお稽古や塾にもついていくのだが、どうにも暇なのでロビーや稽古場の隅で寝ていることがほとんどだったり……。

「じゃ、これまたいつものようにミューに連絡をしよう」

「じゃ、いきましょ」

「うん」

「はい」

子供同士の遊びに混ざるなんて面倒だと思っ人もいるかもしれないが、俺はそうは思わない。

これはこれで、いい骨休めになるんだなあ。

16:20

骨休めIN高町家

「ボンビラス星てどこやねんこー!!」

「え〜〜と……。アンドロメダ星雲の中…とか」

「いやそんなマジレスされても……」

「ハハハハッ！すっかりハマられちゃったな、ケン」

ミューを呼び出し、高町家に残っていたラファエロとミケランジエロも加わり、リビングにてテレビゲームに興じる俺達。

プレイするのはファミリーゲームの決定版、桃鉄！

……で、残りターン一桁に突入したところで負け試合確定となつてしまった俺……。

「イエーイ！作戦成功」

「やったねミケちゃん」

原因は横でハイタッチしてる橙亀と栗毛女兒の2人だったりする。こんちきしょう。

桃鉄ファンならご存知だろう、恐怖の惑星“ボンビラス星”を。

言わずとしれた看板キャラ、キングボンビー。

このキングボンビーに憑かれたプレイヤーが時折強制連行されるのが、ボンビラス星だ。

脱出マスに到達するまで、ブラックジャックも真つ青な額の金を毎ターン容赦なく搾り取られるという悪夢のような星だ。住民全て闇金業者がこの星はッ。

「ぐっ……なのはちゃんは大丈夫だと信じてたのに」

「健さん、勝負の世界は非情なの。油断したほうが負けなの！」

「…なのは。アンタ、キャラ変わってない？」

「コイツはミケランジェロと組むところなるのさ」

ラファエロ曰わく、普段は真面目でいい子なのはちゃんだが、何かしらミケランジェロと組むと途端にはっちゃけるらしい。

まあ真面目すぎいい子すぎも考えものだとは思っし、そういう悪友的存在がいるのは非常にいいことだとも思っただけど…。

「キングボンビーに食われた金が戻ってくるわけじゃないんだよなあ…」

「あはは。大丈夫、次はきつと勝てるよお兄ちゃん」

「そ、そうです！キングボンボーなんて大雪山おろしで投げ飛ばしちゃえばいいんですよっ！」

はあ、妹的存在2人の慰めが身にしみるなあ。

まあミューが微妙な間違いを犯しているがご愛嬌だろう。

それはさておき、ご存知とは思うが、桃鉄の最大プレイ人数は4人。

現在プレイ中なのは俺、なのはちゃん、ミケランジェロ。そしてもう一人…いや、もう一組。

「よし、ここでコイツの出番にやあ！」

「駄目だよリン！このアイテムはまだつかっちゃ駄目！」

「えー！？エリスのおケチー！」

「んなつ！？わ、私はケチなんかじゃない！」

「ケチケチドケチのケチスにやー！」

「なにをーッ！」

「ふっ、二人とも落ち着いてください！」

コントローラーの置かれた座布団の上で、やいのやいのと騒ぐ3つの小さな人影。

彼女らは人じゃあない。

“心と感情”を持ち、もともと人々の近くにいる存在。

多様な道具・機構を換装し、オーナーを補佐する全高15cmの
フィギュアロボ。

その名を、“神姫”という。

…そう、あの“武装神姫”だ。

主にフィギュアとネットゲで展開している代物だが、俺が知っているのは友達に勧められたPSP版のみだったりする。

それが、この世界にホビーの一つとして存在していたのだ。
…タートルズの世界に武装神姫？どんな組み合わせだよ。

ちなみに目の前にいるのは言わずもがな、すずか達三人の神姫だ。

すずかの神姫、ネコのように気まぐれな人格設定のマオチャオ型神姫、リン。

アリサの神姫で、イヌのように活発で主人思いのハウリン型神姫、エリス。

そして、素直で真面目、気配り上手なのはちゃんの神姫、アーヴアルMk2型神姫、このは。

リンはミューに、エリスはアリサちゃんが執事の鮫島さんに連絡して連れてきてもらったのだ。

「神姫かあ、オイラも欲しいなー。ドナちゃんに頼めば作ってくれるかな？」

「なんだ？亀型神姫でもオーダーする気かよ」

「緑の甲羅を背負った、緑色の肌の美少女ロボット……」

なんて想像をボソツと口走ったら、全員が露骨に嫌そうな顔になった。

「お兄ちゃん、それは……」

「うん、我ながら無いなって思う」

「うへえ、それなら普通に買ったほうがいいや」

「でもミケちゃん、今月のお小遣いピンチって言ってなかった？」

「神姫ってけっこう高いわよ？」

「先にいつとくが、金は貸さねえからな」

ぼやくミケランジェロになの、アリ、ラファの三段活用が突き刺さった。

容赦ない攻撃に晒されたミケランジェロ。今度は自分の十分の一以下のサイズの神姫3娘に泣きついていた。

「3人とも、みんながオイラをイジめるんだよ」

「無駄使いする自分がいけないんだよ」

「ご利用は計画的に！なのにな」

「頑張ってお金貯めて、いい子を買いましょう？」

うわあ。前の世界でゲームやってた時も思ったけど、神姫達って
純粹ゆえに辛辣なんだよなあ。

でも、それぞれ性格の違いこそあれ、みんないい子なんだよね。

俺も貯金して買おうかな？

「今日ね、私達のクラスに転校生がきたんだ」

「転校生？」

「こんな時期に？もう4月の終わりじゃない」

ひとしきり遊んでから帰宅。

月村家の全員（メイド&メイド見習い含む）が揃った食卓で、さすがにこんな話題を出してきた。

「うん。それでね、男の子んだけど、不思議……というか、ちょっと変な子なんだ」

『変な子？』

忍さん、ミユー、そして俺の声がきれいにハモった。

他人の悪口や陰口をめつたに言わないすずかに“変な子”と言わしめる男子児童って一体……？

……

……

.....

……うん、なんて言うかもうね……。

とりあえず纏めてみよう。

・名前は喜望峰飛駆きぼうみね ひかる

・髪は銀髪ロングで、前髪には赤いメッシュがギザギザに入っている。

・右目が赤、左目が青のオッドアイ。

・年不相応のキリツとして整った顔立ち。所謂イケメン。

・外見の特徴は全て天然物であると主張している。

・突然ずかたち三人に話しかけてきて、いきなり呼び捨てにしてきた。

・その馴れ馴れしい態度にアリサちゃんがカチンときて追い払おうとしたが、聞く耳を持たなかった。

・以後、学校が終わるまでの間一日中付きまどってきた。

こんなところだ。

三人が玄関から走って出てきたのも、アリサちゃんが最初不機嫌だったのも、どうもコイツが原因らしい。

そりゃ、不愉快なヤツに一日中付きまとわれてイラつくなというほうが無理な話だ。アリサちゃんは悪くない。

さらに顔に関して、イケメンには間違いないけども、すずかたちはどうにも腑に落ちないらしい。

すずかは「まるでお面をつけてるみたい」と称してたけど、つまりは作り物っぽい顔ということだろう。

「…すずか。当面、できる限りその子に近づかないようにしなさい」
「でも…」

「俺も忍さんに賛成。

喜望峰くんには申し訳ないけど、ただでさえゴタゴタしてるのに、そんなツツコミ所満載の怪しさ満点なヤツがいるなんて、正直気が気じゃない」

すずかはちょっと渋ったものの、最終的に受け入れてくれた。明日になったら2人にも話すと言ってくれた。

やっぱりすずかはすずかで、喜望峰くんに対するいい感情は持ってなかったようだった。

とにかく、容姿からその行動に至るまで、怪しい部分が多すぎる。

こっちにケンカを売ってるとしか思えない。

その後、俺と忍さんで話し合い、一応高町家とタートルズに伝え
た上で、しばらくは様子見ということで決まった。

何もなく、ただのしゃばりなイケメン男子ならなんの問題もな
いんだけどねえ。やれやれだ。

23:00 自主訓練

夕食を済ませ、風呂に入り、しばしの団欒。

すずかやミューは部屋のベッドでぐっすり寝ついたころだろっけ
ど、俺の1日はまだまだ終わらない。

キイイイイン……

海鳴市のはるか上空。

街明かりと月明かりに挟まれた夜空を、赤、白、黄の三色が切り裂いている。

イーグル、ジャガー、ベアー。

ゲッターロボが分離した三機の戦闘機……つまり俺そのものだ。

「ぐっ……」

イーグルの機首を一気にあげ、水平飛行から垂直に上昇。ジャガーとベアーがそれに続く。

角度はほぼ90°、速度はマッハ超え。まともな戦闘機なら気圧でバラバラになっているだろうが、ゲットマシンはそんなヤワじゃない。

ただ、3つの機体からだに1つの意識。

マシンは平気でも俺はそんなことはなくて、最初のうちは頭はこんがらがるとし、吐き気はエンドレスで、まともに飛ぶこともできなかった。

「それでも……大分慣れたけどなっ」

急降下、急旋回、急上昇、そして渦を巻くようにグルグルと曲芸飛行。

ゲットマシンの訓練は、ネットで拾った航空ショー動画を参考にしているんだ。

そう、訓練だ。

ご存知の通り、俺の能力はゲッターロボに変身することだ。

当然、その力を存分に振るえるようにするには訓練が必要なんだが、昼間だとどこにも一般人にバレる危険性が高い。

もしバレたら、月村家や高町家に多大な迷惑をかけるだろうし、それは絶対避けたい。

なので、少しでも人目を避けるべく、夜中に訓練することにした。これが、俺の昼夜逆転生活の理由だ。

「よっっ、このまま…」

脳裏に、赤いマントを翻すゲッター1を思い浮かべる。

「チエエーンジッ！ゲッターアア…」

イーグルを先頭に、ジャガー、ベアーが連結、変形していく。

腕が伸び、足が伸び、二対の角が立ち上がる。

「ワンッー!!」

最後に背中にマントが広がり、風にたなびく。
チェンジ完了だ。

「ゲッタートマホークッ!!」

続けて、両肩からゲッタートマホークを取り出し、そのまま素振り始める。

「フンッ、ハッ、せいっ!!」

これは、空中という不安定な場所で斧をしつかり振れるようにするためだ。

簡単そうに見えて、これが意外とコツがいる。

初めて降った時なんて力任せに降ったもんだから、そのままの勢いでグルグル回ってたな。

「よし次っ」

素振りをやめトマホークを引っ込める。

そしてその場でひっくり返って、真つ逆様に急降下！

「ゲッターミラージュー！」

もちろん、うっかり見つからないよう光学迷彩を展開。
ミラージューマント

凄まじい速度で地面へ迫る俺の視界に映るのは、海鳴の山々。

「もうちよい…もうちよい…」

高度が下がるにつれ、段々と木々の輪郭がはつきりしてくる。

ふう、気分はまさにチキンレース（ちなみにこの間、ほんの数秒）

「……………ここだっ！」

纏っていたマントを払い、迷彩が解除される。

姿を表した俺（ゲッター1）と地上の距離、目測50m！

「オープンゲエツト！！！」

すかさずジェットマシンに分離し、勢いを殺さず森の中へと突っ込む。

あ、ベアーの右側がかすった。

「んぐぐぐ……」

たまに枝や幹にかすりつつ、木々の間を縫うように飛んでいく。ぶつちやけ言つと、俺が自主的にやってる中でこれが一番キツい。かなりの集中力を使うから、精神がガリガリと削られていくんだよ。

「さて、今日はいけるかな……っ！」

精神負荷過多な飛行を続けつつ、じわりじわりとフォーメーションを作っていく。

ジャガーを先頭に、ベアー、イーグルが連なる合体フォーメーション……。

「チエンジゲッター……」

ジャガーの目前に太い枝が……避けたッ！

「ッー！！」

白い流線形の頭部に、スラリと伸びた赤い足。

象徴とも言つべき右手のドリルが、木々の間から差した月明かりを反射する。

2！
これぞ地上を疾駆し、地中を**暴進**する高速戦闘形態……ゲッター

ゴシャアアア……！！

「あだだだ……」

…樹木におもつきし激突しました。

変形完了した瞬間、完全に油断したね。うん。

「うっわ。ごめんなさい…」

被害者くせいじやさんは、哀れにも真ん中からへし折れて倒れてしまっ
た。

全力で謝罪しつつ、折れた上半分をきちんと地面に倒し、ボロボ
ロになった両方の断裂面をドリルで削って綺麗にしておく。

どうか、新しい芽が生えてきますように……。

…こんな調子で、小休止を挟みつつ、訓練は明け方まで続く。

さて、マツハスペシャルの練習を始めよう。

木に気を付けつつ……とか言ったりして。

ゴーンー

「おびっ…」

…上から太めの枝が落ちてきた。
どうやら折れた枝が他の木の枝に引っかかってたっぽい。

うん、調子乗りました。ホントすみません、ハイ…。

05:00

早朝鍛錬

まだだ、まだ終わらんのだよ！（半泣き）。

というわけでゲッターの訓練で既に疲労困憊なのだが、俺の1日はまだまだ続く。

現在地は高町家の道場。

「脇が甘いぞ、ケンよ！」

「はっ、はい!!」

スプリンター先生に体術の稽古をつけてもらってます。ヒヤッホウ！（ミーン）

初めは土郎さんにも稽古をつけてもらおうと思ったけど、さすがに体力が追いつかないので断念。

それに、俺の…つまりゲッターのバトルスタイルは武装、能力を切り替えながら戦うトリッキーなもの。

剣術に特化した土郎さん（実は暗器も使っらしいけど）よりも、武器と体術を合わせた武器格闘のスプリンター先生の方が相性が良かったのだ。

「ほっ！」

「うわ!？」

足を引っ掛けられ、前のめりに倒れる。

しかし止まっではいけない。

反射的に転がると次の瞬間、俺がいた場所に先生の蹴りが叩きつけられた。

「集中力を途切れさせてはいかん！目、鼻、耳、肌、動。あらゆる感覚を研ぎ澄ますのじゃ！」

「はいッ！！」

チュンチュンと外で小鳥がさえずる中、道場からは床がキュキュツと鳴る音に加え、時折「ぐへっ」というくぐもった悲鳴が聞こえてくるのだった。

一方、高町家の庭では。

「頑張ってるねえ、健君」

「そうだな」

「でも、ちょっとハードじゃない？夜中も一人で稽古してるんですよ？」

「あいつ自身、あれで結構楽しんでるからいいんじゃないか？さあもう一本いくぞ、美由希」

「うん！お願いします、恭ちゃん」

自分達の稽古場を、熱心な初心者ヒキナーに快く明け渡した兄妹の姿があった。

08:00 　　すずか護衛

「…で、冒頭に戻るわけだよ」

「お兄ちゃん、何か言った？」

「いや、いい天気だなと思って」

少々おぼつかない足取りな俺の横で、「ふふ、本当だね」と微笑む制服姿のすずか。

ちなみに、毎朝グロッキーな俺を見て毎朝爆笑してくれやがる猫マオチャオ型神姫のリンは、すずかの肩に座って鼻歌を歌ってる。

ちくしょう、絵面が微笑ましくて怒るに怒れん。

…と、目的地が見えてきた。

スクールバスの停留所だ。

「なのはちゃんアリサちゃん、おはよう」

「あ、すすか。おはよう」

「すすかちゃんおはようなの」

いつもの2人は先にきていたようで、向かってくる俺達に手を降
ってる。

元気だなあ、ホントに。

「おっはよーございますにゃー」

「おはよース…」

『おはようございまーす!』

テンションに富士のてっぺんとふもとぐらいの差があるリンと俺
にもまた、2人は元気よく返してくれた。

アリサちゃんがリンの高テンションに苦笑し、なのはちゃんが俺
を労ってくれる。

これも毎朝恒例だ。

で、そんなこんなしているうちに、バスがやってくる。

「あ、すずか。例の転校生君の件、よろしくね」

「あ、うん」

バスに乗り込む直前、すずかに念を押しておいたら、その隣のアリサちゃんが露骨に嫌そうな顔をしていた。

どうも、話で聞いた以上に嫌ってるっぽかった。

好感度ってのはなかなか上がらないくせして、下がる時は急転直下だからなあ。

「じゃ、いつてらっしやい」

「いつてらっしやいなのにや、マスター、アリサちゃん、なのはちやん!」

『いつてきまーす!』

ドアが閉まり、すずか達三人を乗せたバスが発車する。

遠のくバスの姿をしばしばーっと眺めてから、ふうっと一息。

「さて、帰るか」

「帰るのにやー」

にゃんにゃん歌い出すリンを肩にのせ、きた道に戻る。

屋敷に帰ったら、すでに仕事を始めてるであろうミューの頭をひと撫でし、軽く激励してからシャワーを浴び、あとは泥のように眠る。

午前9時30分。こうして、俺の1日は終わりを告げるのだった。

07話「限界バトル叩きつけられて燃え尽きそうです」(後書き)

Information

「武装神姫」参戦」

幕間「やー、強制力とかかけられてなくて良かったー」（前書き）

健が語ったとある1日の、すずか視点でのお話。

ただし後半は……

へへへー

幕間「やー、強制力とかかけられてなくて良かったー」

すずか side

「みんな、ちょっと時期はずれですが、このクラスに転校生がきました」

転校生？もう4月も終わっちゃうのに？

周りのみんながざわざわする中、私、すずかが不思議に思っていると、先生に呼ばれて男の子が入ってきた。

『……………』

すると、一気に教室の中がシーンとなっちゃった。

それもそのはずで、入ってきた男の子は長くてキラキラした銀髪を背中まで伸ばしていて、前髪は一部が赤くギザギザになってる。さらによく見ると、左右の瞳の色が違っていたから、ちょっとビツクリしたかな。

ただ、一目で瞳の色までわかるのは私が夜の一族だからで、そう思うとちよっとフクザツ…。

あれ？ダジャレみたいになっちゃった。

「はじめまして、喜望峰飛駆きぼうみねひかるです。よろしくお願ひします」

な、なんだかすごい名前……。

個性的な子だな〜って思って見ていたら、ふと喜望峰くんと目が合った。

「……………」

と思つたら、そのままなぜか私の方をじつと見つめてて…。
それもほんの何秒かだったけど、なんだか顔がにやにやしてよう
な……。

うーん、気のせいかな？

って思ってたんだけど、休み時間になって、なのはちゃんとアリ
サちゃんにそのことを言ったら、

「すずかちゃんも？なのはもだよ」

「それなら私も感じた。なんかニヤついててイラツときたから、つい睨み返しちゃったけど」

って。

私だけじゃなく、なのはちゃんもアリサちゃんもでした。

じゃあどうして見られてたんだろう、他の子も見られてたのかな？

…ってお話していたら今度は、

「やあ、ちよつといいかい？」

その喜望峰くんが、親しげな笑顔を浮かべてで目の前に立っていたのでした。

よく見たら、喜望峰くんの後ろでクラスの何人かが呆然とこっちを見てる。

後でこの子達に話を聞いたら、色々質問してたのに、ぜんぶ無理やり無視されたんだ。って、怒ってたなあ。

「はじめまして、僕、喜望峰飛駆。よろしく」

ああ、きつと、爽やかな笑顔っていうのはこういうのを言うんだなあ……

でも、なんだか作り笑いっぽく感じちゃうのは私だけなのかな。

ただ、会ったばかりの男の子に突然話しかけられるなんて初めてだったから、ちよつと慌てちゃった。

でも何とか私達も自己紹介しかえして……アリサちゃん不機嫌そうだったなあ。

そうしたら……

「なのはにアリサにすずかか。可愛い名前だね
僕のことには気軽に飛駆か、ひーくんって呼んでね。なのは、アリサ、すずか」

バン！

「ちよつと 안타ー!!」

「へ？」

ああっ、アリサちゃんが怒っちゃった！

どうしよう、ってなのはちゃんと顔を見合わせるけど、その間にもアリサちゃんは立ち上がって喜望峰君に迫っていく。

「人のこといきなり馴れ馴れしく呼び捨てにしないで！
なにがひーくんよ。そんなの却下よ却下！」

「あ、アリサちゃん！何もそんなに怒らなくても」

「そうだよ、ただ名前を覚えてくれただけなのに……」

私となのはちゃんできにかアリサちゃんを落ち着かせようとす
るけど……思っていた以上に喜望峰君が気に入らなかったみたい。

「それだけじゃないわ！さっきから喋り方が妙に芝居がかって胡
散臭いし、何より私達をずっとニヤニヤした目で見てる！」

ビシッ！とアリサちゃんが喜望峰君に指を突きつける。

「さっき見たわよ、他の子に話しかけられ時のアンタのどうでもよ
さそうな顔！」

私達にだけ猫被って……一体全体、なんのつもりよ……！」

さ、さすがアリサちゃん。よく見てるなあ。

でも、確かに私も気になってはいたんだよね。

授業中もチラチラ視線を感じたし……。

喜望峰君は……あれ？

なんとなく、さっきよりニヤニヤしてるような……？

「はははっ、アリサは素直じゃないなあ」

『え？』

教室中が「なに言ってるの？」っていう空気でいっぱいになった。

アリサちゃんはもちろん、私やなのはちゃん、こちらを見守ってた他の子達もポカーンとしてる……。

そんな周りを無視するように、喜望峰君はニヤニヤ笑い 本人は多分爽やかなつもりなんだと思う のまま、ペラペラ喋り続けている。

「照れなくていいんだよ、アリサ。まあ、仕方ないのはわかるけどね。」

あ、でもこうやってムキになってるアリサも可愛いな。よしよし」

「……ッ!？」

喜望峰君にいきなり頭を撫でられて、怒ってて少し赤くなっていたアリサちゃんの顔がみるみる青ざめていく。

と、急に自分が同じように頭を撫でてもらった時のことが浮かぶ。

お姉ちゃんやノエル、ファリン。

土郎おじさんや桃子おばさん、恭也さんに美由希さん。

最近で言えば、スプリンター先生とタートルズのみなさん。

そして、お兄ちゃん。

ああ、うん。アリサちゃんが青ざめちゃったのがよくわかる気がする。

どう違うのかわからないけど、なんとなくだけど、“あれ”はお姉ちゃんとも、お兄ちゃんとも、他のみんなとも全然違う。

アレは、嫌だ。

「アリサちゃんに触らないでッ!！」

考えていたのはほんの一瞬。

一番初めに動いたのはなのはちやんで、私が気付いた時には立ち上がって喜望峰君の手を払ってた。

「…どうしたんだい？なのは」

「馴れ馴れしく呼ばないで！」

キツ、となのはちやんが喜望峰君をにらみつける。
そうしたら、初めて喜望峰君が驚いた顔になった。

「アリサちゃん怒ってるのに…！何でそんな風に笑ってるの!？
嫌がってるのに、何で触ったりしてくるの!？
何で“相手の心”を無視するの!？」

「あっ…」

なのはちやんが怒ってる理由がわかった。

それはつい最近、私やアリサちゃんも話してもらったこと

「国や人種、種族や宗教。職業、趣味、食べ物の好き嫌い……。生きとし生ける全ての者達は皆、あらゆる点で異なっておる。

じゃが、それらが繋がり合うことで生まれるものがある。

仕事、スポーツ、芸術、言葉、剣、拳。方法は無限大じゃ。

それらで表現しうる、それぞれの“心”。

これが、時にはぶつかり合い、時に競い合い、時には同じ“何か”を共有することで繋がり、生まれるもの……

それが、“絆”じゃ」

「な、何を言ってるんだいなのは。僕はただ君たちと友達に…」

「嘘なの!!あなたは、なのは達を見てない。自分しか見えてない!見ようとしてない!

こんなの、ただの自分勝手だよ!!」

今、なのはちゃんはさっきまでのアリサちゃんより怒ってる。

…うん。なのはちゃんの気持ち、良くわかるよ。

「…なのは、本当にどうしたんだい。

あ、わかった。僕がアリサだけ撫でてたからだね。

はは、それならそうと言ってくれたら…」

「なのはちゃんアリサちゃん、行こう」

「は?」

席を立って2人の手を掴んで、教室の外へ引く張る。

「わわっ!?!?」

「すずか!?!?ちよつと何を…」

「いいから、外にいこ？」

後ろで何か声がするけど、もう聞かない。

もうすぐチャイムが鳴るけど、何より今はあの子の前から離れたかった。

だって私……

あの子が嫌いだから。

すずか s i d e , e n d

??? side

一体どうなってんだよオイ。

超イケメンな俺のニコポが通じないだど？

口調も爽やか、そしてフレンドリー。ナデポも使った俺に死角は無いはずだ。そう、死角なんて一切……。

…待てよ。そうか！既に落ちてるんだな！

小学生つてのは単純に見えて結構気難しかったりするからな。

まして、原作であんだけ小学生離れした発言がましまくった3人だ。

きっと俺の美少年っぷりに羞恥心が振り切れちゃったに違いない。

うっわ！俺ってすげえ罪作りじゃん！？ハハハハッ！！

さて、となれば後は時間の問題だな。

あのポケ神は確か、無印が始まったらデバイスを…俺専用の美少女ユニゾンデバイスを送るって言ってたな。

魔力がEXあつたって、デバイスがなけりゃ宝の持ち腐れだからな。それさえ手に入りゃあとはずっと俺のターン！

…気がかりなのは、放課後校門でなのは達に話しかけてたあのブサメン地味野郎だ。

背丈から見て中学生か高校生だろうが、あんな奴は原作にいねえ。オリキャラか、俺以外の転生者だな。

ハ、残念だったな。なのは達は既に俺の嫁だ。

そもそも、年齢が離れてる時点で俺に圧倒的なアドバンテージがある。

ま、デバイスが届いた後、黙らせてやれば済む話だ。

どんな力を持つてるか知らねーが、俺に勝てるわけがねーからな！

さてと、次はフェイトにアルフだ。…余裕があればプレシアも落としておくか。

フツ、ハーレムオリ主も楽しじゃないぜ。

ハハハハハハ！！

「モノローグがムダに長いよー」

知ってる？独り言が多い人ってとってもエッチなんだよ。

まーいにーちひとつー、まーめちしっきーランランラ。

「まあそう言うな、大した道化じゃねえか。クッククック」

ボクと一緒に“下”を覗いてる、ツンツン頭で片乳出してる大男はさも可笑しそうにしてる。

うーん、他人ごとなら確かに爆笑もんなんだけどねー。

「ねー神様」

「ああ？」

「ボク、アレのところにいかなきゃいけないんだよね？」

「まーな。アイツを生かすも殺すもオマエ次第だ」

「でしようねー……」

安西先生、すごくイヤです……。

「さすがボクを創っただけあって、いい性格してるよねー」

「なんだア？寝めても何も出ねーぞ」

神様、褒めるって言葉辞書で引いて。赤線引いて。

「うーん……」

何はともあれ、ひじょーに困った。

このままだと、アレが死ぬまでボクは一生付き合わされることになる。

あえて言おう、絶対にイヤだと!!

「アレのワガママに付き合うなんて疲れそうだし、めんどくさいし、おもしろくなさそーだし……」

…あ、そーいえば、

「ねー神様」

「ああ？」

「なんか、なのはちゃん達と、原作で見覚えのない人が一緒にいなかった？」

イケメンでわけでもないし、服装も可もなく不可もなく。

あ、でも背は高かったね。

「ああ、いたな。どーやら、俺以外の神が送り込んだ転生者らしい。ま、同じ世界に転生者がダブるなんざよくある話だ」

「ふーん…」

「ちなみにソイツ、月村すずかの屋敷に居候してるようだ」

「ん？」

…ああ。そーいえばその人と話してる時の三人…特にすずかちゃんがいい顔してたっけ。

ということとは、そっちの人のがなのはちゃん達との関係は、アレより断然良好なハズ。

「…へへへー」

うん、コレはアリだよな。

神様も言ってたしね。生かすも殺すもボク次第だー…って。

「神様ー」

「ああ？」

「ボク、出番がとっても楽しみになってきたよ」

「そーかい。まあ、オマエのやる気なんざどうでもいいがな。俺を
楽しませてくれりゃそれで」

「でしようねー」

無印開始までもうすぐ。

いやー、ボクってホント厳禁な性格してるねー。

へへへ

幕間「やー、強制力とかかけられてなくて良かったー」（後書き）

主人公が絡むまでもなくへし折られた“なのは仮面笑顔フラグ”

次回、ついに無印が始動

08話 ねま、おいで (前書き)

トキ―地の文皆無の作品パレード―!

08話　　なあ、おいで

????side

油断していた……んだと思う。

初めて任された、初めての1人での発掘調査。

1人で遺跡に潜ること自体は今までに何度もあったけど、そういうのは大体だれかと手分けしたりとか、そういうのだから本当にたった1人っていうのは初めてだった。

まあ、現地の調査団の人達には手伝ってもらったりしたんだけど。

だから僕はきつと、無意識のうちに浮き足立ってたんだと思う。

高次元空間を航行中、原因不明の事故に巻き込まれる。

死者はいないものの、被害は甚大。

中でも深刻なのは、積み荷であった古代遺物の流出

ロストロギア

合計して26)・(あるうち、5つは散らばりロスト。残りの21はとある世界へと降り注いだ。

一足先に発った輸送船からの連絡に思わず呆然

「すみません、転送装置借ります!」

「あっおい!?!」

するよりも先に、体が動いていた。

積み荷とは、どんな願いでも叶えるという宝石。

しかし、これはとんだ欠陥品だ。

魔力の高エネルギー結晶体であるこれは、暴走する危険をおおいはらんでいるんだ。

「一歩間違えば、大惨事になる！でも……」

ロストしたのが“あの5つ”だったのは、不幸中の幸いだろうか。

アレも原理は同じものだけど、残りの21コに比べれば暴走の危険性はかなり下がる。

……とはいえかなりの危険物であることに変わりない。

「両方とも、早く見つけないと……！！」

まずは、流れ着いた先がハッキリしているほうから探し出す。

転送装置へと走り込んだ僕は、中に取り付けられたらコンソールを叩く。

「第一級ロストログア、ジュエルシード……」。

そして、マスターシード(……………)」

僕が必ず…

「探し出してみせる…！」

そうして、僕は光に包まれ、その場から姿を消した。

行き先は、次元の外れにある管理外世界。

第97管理外世界、地球

ブーッブーッブーッ

「ん、^{アラート}警報？どうしたんだ？」

《待ってる、今調べる》

ムムム...

《…なに！？》

「なんだどうし…ゲッ!？」

《高エネルギー体急速接近!!
数値だけなら核並みだ!!》

「んなバカな!?!ここはただのデブリ帯だぞ!?!」

ゴオオオ……

「あの光が！って、なんつー速度だよ！？ビームにしたって速すぎ
……」

《回避………不可！！》

ゴオオオオオオ！！

「じおおおっっっ！？」

キーンッ

「来るな！！核エンジンが暴走してるんだぞ！」

「あなたを死なせはしません！！」

「っ
「！」

カッ

ドゴアアアア……

「……っん」

あの人は……

「……生きてた」

良かった……。

「あれ……。目が……」

時間^{とき}が……来た……みたいだ。

「あの人は……きっと……もう……大丈夫」

ボクは1人じゃない……あの人も1人じゃない……。

人と人は、想いの力で……繋がっているから。

キイン

「あ……れ……？」

この……光は……

キーンッ

静か……。

とっても静か……………。

…言ってた。もう、何も怖くないよ、って……………。

もう、私を怖がらせるものはないよ……………って。

怖いものは、もう…ないからねって……………。

……………ほんとう？

や……………いやっ…！

静かだけど……………いない。

誰も……………いない。

さみしい。

……………やだ。 独りぼっち……………イヤ!!

さみしいのは…イヤッ!!

怖い……………こわいっ……………!!

死ぬのは……………いやあッ!!!!

キーンッ

「きょうはみんなもつれてきたから、もしよなかにドロボーさんがきても入っちゃらだゾ」

「キャン」

「…お？」

「クウン？」

……キラッ

「！」

「おお、ながればしだ！しってる？ながればしをフ口あつめると、ねがいごとがかなうんだぞお」

「（汗）」

……ゴオオ……

「……？」

「おおそーだ！ねがいごとしなくちゃ」

ゴオオオオオ……………

「!?!」

「んーと、えーとお。あれもほしいしこれもほしいし……………んもう！
オラ、まよっちやうっ」

ゴオオオオオオオ!

「キャンッキャンッ!!!」

「んも、なに？よるにほえちや！きんじょめいわくだぞ。めっ!」

ゴオオオオオオオオオ!!

「!?!?!?!」

「おっ?」

グオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!!!

「おおおおお!!」

キーンッ

「このあたりだな……」

「うん、もう少し行ったところみたいだよ、お兄ちゃん」

「廃コロニーに謎の高エネルギー反応、か。怪しいニオイがプンプンするぜ」

「なに？もしかして、怖くなっちゃった？」

「んなワケあるか！まったく、実の兄貴をからかうんじゃないよ」

「エへへ、ごめんなさい」

キーン

「やれやれ……ん？」

「どづしたの？……って、ええええ！？」

「反応が動き出した！オマケに……」

キーンッ

散り散りになった賢者の魔石。

招かれしファクター達。

そして……………

「ええい！ちったあ人の言うことも聞かんかい！！一体誰のお陰で生活できると思っとるんじゃ！？」

「てやんでえ！納得できねエ話を黙って聞けるかってんだ！！」

「もう！食事中ぐらい静かにしてよー！！」

《…？どうした》

《今の波動…。これは……………》

「…あれっ？今、流れ星見えなかった！？」

「なんですとっ！？えー商売繁盛商売繁盛商売繁盛！！」

「もうとっくに消えちゃってますよ、専務」

「ありゃ？」

「ははっ！専務らしいや」

あはははははっ！

「ッ！？なんじゃ、この禍々しい力は！？」

「？」

「うーむ……これは放っておいたら取り返しのつかないことになる
やもしれん」

「！」

「アン？」

「急いでワイプホールの調整をせねばならん。あの娘がいけない以上、
ワシらで何とかせねば……手伝ってくれ！」

「（グッ！）」

「アンツ！」

「来る日も来る日も残業残業……。はあ、企業戦士はしんどいなあ」

「ぼやいてる暇があったら手を動かさない、手を」

「そういつことだ。……はい終わりっ」と

「なにい！？」

「悪いな、先あがらせてもらっぜ」

「ちなみに、あたしもこれでラスト」

「げえ！？」

「げえって……。あんたが考えなしにイベントの企画なんか引き受けるからでしょっが」

「うっ！」

「大体、あたし達が残業してるのだって、あんたの企画を手伝うことになったからでしょ」

「まったく、フォローするこっちの立場にもなれって話だ」

「うっ……」

「じゃ、そういうわけだから、お先に失礼」

「ま、気絶しない程度に頑張れ。じゃあな」

ギィ……………バタン

「……くっそお！負けてたまるか！！サラリーマンの意地、見せてやるうっ！！！！」

カポーン

「…うん？」

「ふえ？レオちゃん、どうかしたの？」

「あ、いや…。何でもないよ」

「そう？じゃ約束通り、なのはが背中流してあげる！」

「今更だけど、流すっていうか…磨くだよな」

「あ、確かに…。でもホラ！みんなのために1コずつタオル買ってきたんだよ。しかも色違い！」

「ホントかい？…青と赤はともかく、紫とオレンジなんてよくあったね」

「ドンキは偉大なのっ！」

「なるほど。それじゃ、そろそろお願いしようか」

「はい」

ザバア…

「……何か、嫌な予感がするな」

「…ッ!？」

「ミュー?」

「あ……これは…なに？」

やだ…怖い…怖いよお……!!」

「ミューちゃん!？大丈夫?しっかりして!」

「すずか!ノエルさん呼んできて。早く!」

「う、うんっ!」

「あ……あううう………」

おぼっ

「ふあっ……」

「大丈夫、俺がついてるから。そばにいるからさ」

「健……さあん……」

降り注ぐ、21の魔石。

禁忌の力を宿したそれは、果たして何を導くのか。

不幸か、はたまた幸福か。

それとも……

キーンッ

この世界の物語が始まる。

08話

なあ、おいで

(後書き)

と、いうわけで無印始動です

オリジナル設定や新規参戦作品が多数ありますが、今はまだ明らかにはしません

本編にて随時明らかにしていこうと思っています

それではまた次回

09話「いや、ひょっとするとブリーリードミッドかも…」(前書き)

あ！やせいの ユーノ があらわれた！

そんな第九話

09話「いや、ひょっとするとブリーリードックかも…」

誰か……僕の声聞いて。

力を貸して……。

魔法の力を

「んが…」

自室のベッドの中、窓から差し込む淡い光……“朝日”で目が覚めた。

「…朝に起きるってのも久々だな」

時刻は6時。

いつもならスプリンター先生の朝稽古を受けている時間だ。

しかし夕べと今朝は、ゲッターの訓練も体術の稽古も自主休暇とさせてもらった。

理由？それなら俺の“腕の中”にいるよ。

「すう…すう…」

ハムスターっ娘のミューが、俺の胸に抱きついて小さく寝息を立てていた。

小柄な全身を使って俺に密着しており、背中に回された手は「離れないで」とばかりにTシャツをギュツと握り締めている。

言っておくが、不健全なことは一切考えてない。

“あんな姿”を見せられた後なのに、それは不謹慎にもほどがあるってもんだろう。

…昨日の夕食時、食堂に向かう廊下で、突如ミューが身を縮こませへたり込み、ガタガタ震え始めてしまったのだ。

恐らくは持ち前のリーダースキルで何かを感じ取ったのだろうが、落ち着いたと思ったらそのまま寝入ってしまったため、結局要領を得ないままになってしまった。「怖い」と何度も繰り返してたけど…

「けん……さん」

で、落ち着けるのに抱きしめて、頭を撫でて優しくヨシヨシしていたらそのまま寝てしまい、しかも俺のシャツを握り締めたまま。無理やり剥がすのも可哀想　忍さんとメイドコンビに脅しみたいなことも言われたが　だったので、軽く夕食を取ってからそのまま同じベッドで就寝…となったわけだ。

「ん、起きた？」

「みゆう……けんさあん……」

「……寝言で呼ばれただけか。はいはい、俺はここにいるよ」

頭を撫でてやると「ふみゆう」と口を　型にして頭を擦り付けてくる。

はふう……。脅威的なこの愛らしさは見ていてすごい和む。

まさに“ハムスター小動物チックな可愛さ”の見本のような……。あ、もともと小動物か。

「やれやれ、これじゃ起きるに起きらんないな」

枕元の内線電話の受話器を取って、ダイヤルをピ、ポ、パ、つと。

「あ、もしもしノエルさん？おはようございます。……ええ、はい
………」

とりあえず、ミューの遅刻はもう確定だからねー。

「……そう言えば」

受話器を置いてから、ふと思い出した。

なんか、変な夢見た気がするなあ……。

こう、ドラクエっぽい衣装着た男の子が、ベットベトンがやたら俊敏になった感じのモンスターと戦ってて……。

「んーと……」

…ダメだ。細かい部分が思い出せん。

比較的どうでもいい内容だったのか、ミューを可愛がるのに夢中になって上書きされたのか………後者の可能性が高い気がする。

「…ま、いつか」

思い出せない以上、これ以上考えたって仕方ない。

さて、すずかを送る時間までにミューが起きてくれるといいんだ
けど。

……結局登校時間には間に合わず、今朝は代わりにファリンさん
が行ってくれることになった。

余談で、ミューの様子を見にきたすずかが複雑そうな顔で

「ミューちゃん、いいなあ……」

と漏らしたのが聞こえた。

……まあ、添い寝くらいなら言ってくれりゃいつでも構わないんだ
けども。

妹分、まして9才の女の子に欲情するほど人間やめたつもりはな
いし。

で、さらに余談だが、そんなすずかの肩には

「リアジユウだいはくはつなのじゃー！」

と笑うリンがいた。

意味わかってんのかね…？

「邪気？」

「はい。この表現がピッタリだと思います」

「うーん、いよいよホラー臭くなってきたねえ」

時刻は正午過ぎ、昼飯を済ませた俺とミユーは高町家を訪れていた。

迎えてくれたのは本日の留守番当番、ドナテロ。ミケランジエロは縁側で食後の昼寝だそうな。

「それで、ソレを僕らに調べてほしいってワケかい？」

「うん。フット団に気を配ってなきゃいけない中、申し訳ないとは思っただけど…」

「ああ、気にしないでよ。そういう正体不明アンノウンの調査には慣れてるか
らな」

ミューがタベ感じた何か。

曰わく、そいつは何かしらのエネルギーの塊らしく、それがいくつか、少なくとも10個以上がこの海鳴に飛来してきたらしい。

ただし、わかったのはそこまでだった。

「…ごめんなさい、健さん、ドナテロさん。
私が自力で調べられれば、わざわざ余計な手間をかけずに済んだの
に……」

刹那、ミューの頭に流れ込んできたのは“強く歪んだナニか”だ
ったという。

漠然としつつも、はっきりと感じられた“恐怖”に、ミューはあ
っさり限界を超えてしまったんだそうだ。

「あーもう、謝らなくていいってば」

「そうそう。すぐに気付いたのはミューちゃんのお手柄だよ。おかげで僕らもすぐに動けるわけだし」

「はい…」

「こういう時はブツが危険であればあるほど、初動の早さが重要になってくると思うんだよね。」

「要は、癌と一緒にだ。」

「なににせよ、放っておくわけにもいかないしね。ひよっとしたら、フット団が絡んでる可能性もある」

「そっぴや、フット団の動きも掴めてないんだっけ…」

「ああ。月村重工や、シロウにも昔の“ツテ”を通して協力してもらってるんだけど……めばしい情報はなし。ニューヨークの仲間とも連絡は取ってるんだけど、沈静化したままで目立った動きはないらしい」

「そうやってドナテロは両の手のひらを上にして肩をすくめた。」

「欧米か！などと言っではいけない。」

「ドナテロ達は生まれも育ちもニューヨーク。れっきとした欧米人？である。」

「それにしても、どーにも静か過ぎて、なんか薄気味悪いな。」

もし今回の件にフット団が絡んでいれば、そこから尻尾を掴めるんだろうけど。」

「今は目の前の問題から何とかしていくしかないね。先生とレオナルド達には僕から伝えておくよ」

「うん、よろしく頼むよ。俺達も足使って地道に調べてみるから」

「わっ、私も頑張ります!」

握り拳を作って意気込むミューだけど、俺から言わせればあまり無理はして欲しくない。

ただ最近、この子は何かと責任を感じやすい性格なのがわかってきたので、無理に止めると返って逆効果だったりする。

自分は無力だ。と落ち込み、負のスパイラルに突入してしまうのだ。

ちなみに、ミューはメイド服ではなく私服の白ワンピース姿である。

今頃かよ、というツツコミはスルーさせていただきます。

「あんまり無理しないでね、ミューちゃん。

それじゃあ、僕は早速サーチ機の作成に取りかかるよ」

「おおっ」

さすがはタートルズのメカニック。
うえだボイスが見事にハマってるよなあ。

「そういえば、先生はどうしてらっしゃるんですか？」

「先生なら、庭で盆栽観賞してるよ。日傘で顔隠しながらね」

「盆栽？先生の？」

「いや、キョウヤのさ」

……あの人、ほんとに大学生か？

高町家を後にし、一路、聖祥大付属小学校へ。
もちろん、すずか達を迎えにである。

「えへへ…」

で、さっきまで落ち込んでいたはずのミューが、何でかちょっとだけ上機嫌になってるんだが、はて？

……あ、もしや。

「考えてみたら、ミューも一緒に迎えに行くのって初めてだね」

「は、はい。その、学校って、私みたいな子がいっぱいいるんですよね？」

「80才の女子児童はさすがにいないと思うなあ」

「そういう意味じゃないですよ…」

なるほど。人見知りなミューだけど、学校という環境には憧れるらしい。

うーん、何とかならないかな。

「…あつ！あれですか？」

と、見えてきたな。

「はい、正面に見えますのがすずか、なのはちゃん、アリサちゃんの通う聖祥大付属小学校でございますー」

「あれが…」

なんて中途半端なバスガイドのマネなんかしつつ、校門へ。

時間は……うん、ちょうどいいくらいかな。

「すずかちゃん達はまだみたいですな」

「うん。でも、もうちょっとで来ると思うよ」

HRも終わったばかりなんだろう。校舎から出てくる生徒はまばらだ。

ま、10分ほど待てばいい話なので、校門の柱に背中を預けて小休止。

…と思いきや、

「…あつ！あれ、すずかちゃん達じゃないですか？」

「え？」

と、首だけを玄関に向けてみれば、紫と金の髪の子が見えた。

いや、やっぱり目立つねえあの2人は。一緒にいるのがなのはちやんだろうな……って、

「あの、健さん。すずかちゃん達、随分あわててませんか？」

「うん、俺もそう見える」

なんて言ってるそばから、3人が玄関から飛び出して一目散にこちへ走ってくる。

イヤ、たしかに今日はこれから塾だけど、始業にはまだ時間があるハズ…

「お兄ちゃん！！」

『健さん！！！』

「おう！？」

ダッシュしてくるやいなや、3人は俺の腕をひっ掴んでグイグイ

引っ張ってくる。

ちよ、袖が伸びる伸びる！

「え、ええ！？どうしたんですか！？」

「え、あれっ！？ミューちゃんなの！」

「本当！？ミューちゃん、具合大丈夫？」

「え、あ、はい。おかげさまで……」

「あんたたち話は後！今は早くいくわよ！……」

「ちよちよちよ！なに？どしたの？」

「いいから健さんも早く！……あぁっ！もう来た……」

来た？何が？

「ふう、本当になのはもアリサもすずかも恥ずかしがり屋だなあ。周りの目が気になるのはわかるけど、そんなの気にせず見せつけてやればいいのに」

振り向くと、そこには赤いメッシュの入った銀の長髪に、赤と青のオッドアイの男の子が。

あー……なるほど。

「この子が例の？」

「うん…、喜望峰君だよ」

すずかに耳打ちすると、予想通りの名前がげんなり返ってきた。

てか、嫌ってるのは話に聞いてたけど、まさかダツシュで逃げたくなるほどとは……。

なのはちゃんもアリサちゃんも、ものすごい嫌そうなの……ってか、むしろ疲れた顔になってるし。

「…ん？」

そこで、喜望峰君の視線が俺に向き

「…おっ」

「ふみゅっ!?!」

スツと通過してミューで止まった。

ミューが大袈裟なぐらいに体をビクツと震わせるが、喜望峰君はお構いなしにミューを凝視している。

そして、フツと笑って赤い前髪をキザツたらしくかきあげた。

…少年よ、それでカツコいいつもりなのか。

「やあはじめまして、僕は喜望峰飛駆。君の名前は？」

「え、えと………ミューって言います」

「へえ、ミューか。君に似合ってたて可愛い名前だね。よろしく、ミュー」

じりじり後ずさりつつ、おずおず答えるミューだが、喜望峰君はニヤニヤ笑ったままスタスタ近づいていく。

そしてリーチの届く所まで近づき、その手を縮こまるミューの頭
へ……………

「おっとごめんよ。この子、人見知り激しいんだ」

させないけどね。

「健さん……」

立ちふさがるように2人の間に割って入ると、すずか達が続いて俺の背後へ。

やはり三人とも怒っているようで、眉が逆八の字だ。

もっとも、イラッときたのは俺も一緒だけど、一応年上だからね。

「……………チッ」

急に無表情になった喜望峰君が小さく舌打ちしたのが聞こえた。
…が、次の瞬間には元のニヤニヤ笑いに戻っていた。

やれやれ、大した猫被りだよ。

「喜望峰君だっけ？はじめまして、俺は清白 健て言っんだ。
悪いんだけど、この子達これから塾で……」

「失礼ですが、“僕”なのは達とどういう関係なんですか？」

人の話を聞けや。

つーか、なのはちゃん達はお前のじゃねーよ。物扱いすんな。

「俺は住み込みですずかのボディガードをしてるんだ。
なのはちゃんとアリサちゃんとは、年の離れた友達かな」

「なっ…居候だと…!？」

「言い方を変えればそうだね」

「……………」

またも俺を無視し、喜望峰 君付けやめるか は俯いて、何
やらブツブツ言い始めた。

「ち…厄介な…。でも…ないな。…フラグは…し
な。それに…ユーノ…念話……………」

端々しか聞き取れないが、段々口角がっり上がってきてるので良
からぬことを考えてるのは明らかだ。

「お兄ちゃん、もういいじつ?」

背後ですずかが裾を引つ張ってきた。

「いいけど、厳しく言わなくていいの？」

「いいわよ。コイツどうせ聞かないから」

「先生に注意されても知らん顔なの」

「馬の耳に念仏かあ……」

先生の話も聞かないんじゃ、俺が言っても大した効果はなさそうだな。

まさか学校の目の前で他人様の子を殴るわけにもいかないし。

「しょうがない、行こう。大丈夫か、ミュー」

「は、はい。ありがとうございます……」

「どづいたしまして」

ミューの頭を軽く撫で、その場を後にする。

振り返ってみたが、喜望峰は未だ自分の世界らしく、俺達が離れるのに気付いていない。

親御さんと担任の先生への同情が禁じ得ない俺だった。

そんなこんなで帰り道。

アリサちゃんの案内で、林道の脇に入った、林の中の未舗装の道を歩く。

ここを通ると塾へ近道らしい。

少女4人がキャツキャツ言いながら談笑していて、俺はその一歩後ろを歩いている。

一緒に帰り道が新鮮らしく、会話の中心はミューだ。
困った様子の彼女だがまんざらでも無さそうで、嬉しそうにはにかんでいる。良かった良かった。

「…兄っつーより親父っばいな、俺」

なんて眩いた時だった。

助けて

「んっ？」

「えっ？」

「ひゃっ!？」

突然、何かが聞こえた。

…それにしただって、ミューはちょっとびっくりにし過ぎだ。

「どうしたの？なのは、ミュー」

「今、何か聞こえなかった？」

「え、何も聞こえなかったよ？」

「き、聞こえました！助けてって……」

「…幽霊？」

「ひひゃあああっ！！」

そんなワードが頭をよぎったので、ボソッと言ったならミューが飛びついてきた。

ちよっと罪悪感。

「うん、聞こえた。“助けて”って」

耳をそばだてて、辺りを見回す。

日が落ち始め、うっすら橙色に染まる中、そよ風で葉が小さくざわめく……

助けて

「
」

なのはちゃんが駆け出す。

「なのは!?!」

「なのはちゃん!?!」

遅れて、アリスちゃんとすすかがなのはちゃんを追いかけていく。

……え、俺?

「ふええ……!」

「……おい」

ミューが右足にしがみついています。

……コレ、なにモジュール?

どうにか引っpegして後を追ってみると、なのはちゃんが何やら小動物を抱えていた。

「……フェレット？」

その首には、丸く真つ赤な宝石が、紐でぶら下がっていた。

09話「いや、ひょっとするとブレイリードッグかも…」(後書き)

思いのほか長くなってしまったのでここで切ります

前置きが長すぎた…orz

次回、ジュエルシールドが牙を向く

その時、健は……

それでは叱咤激励のほか、容赦ないダメ出しをお待ちしております

m (一一) m

10話「ウルトラマンダイナは、やられると非常に残念な感じになります。つま

やっぱりギブミー文章力

あと、纏まった時間

10話「ウルトラマンダイナは、やられると非常に残念な感じになります。つま

「…それでね、そのフェレットくん、なのはちゃんちで預かってもらえることになったんだよ」

「あ、士郎さんと桃子さんのOK出たんだ？」

「うん」

夕飯の時間、住人全員が揃う月村家の食卓は、話題の大半がその日の出来事のこと、ちょっとした報告会みたいになっている。

「それにしてもミユ、なにも足にしがみつくとないだろ。ワンピースの裾ドロドロにして…」

「うう、すみません…」

「あら、マツハで木に突っ込んだ人よりはマシだと思うわよ？」

「んぐっ！し、忍さん……」

怪我して道端に倒れていたフェレットを見つけた俺達は、あの後近くの動物病院に駆け込んだ。

で、怪我は見た目より軽かったが、ひどく衰弱していたので、そのまま一晩病院で預かってもらうことになったのだった。

首に宝石っぽいものをぶら下げていたので、どこかのペットなんだろうけど、尋ねフェレットの情報が無かったので、誰かが一時的に預からなければならなかった。

しかし、月村家とバニングス家は、それぞれが「ねこたま」「いぬたま」と化しているため、なかなか厳しい。

そこで、半ば消去法に近い形で、高町家に白羽の矢が立ったのだ。飲食店を経営してる家だから、本当なら動物は厳禁なんだろうけど、高町家の皆さんは快くOKしてくれたらしい。

「何にせよ、一安心といったところですね」

「良かったですね、すずかちゃん」

「うん」

ノエルさんがそう締めくくり、ファリンさんとすずかちゃんが顔を見合わせ笑う。

それにしてもあの……フェレット？

まあこの際フェレットでもプリーリードッグでもミアアキヤットでもなんでもいいや。

あの首に着いてた赤い宝石、ルビーか？

ペットの装飾にしちゃあ随分と高価すぎやしないか？

「確かに高価ですが、ペットに数十・数百万する服やアクセサリーを着ける人は意外といますよ」

「まあ、ウチの猫達には着けてもせいぜい首輪ぐらいだけだね。窮屈そうなもの」

「お嬢様の言うとおり、飼い主の都合でペットに不自由なんてさせたら、本末転倒ですよ。」

その分、ゴハンはとっても良いものを用意してますから！」

「でも、それだけ大事に思ってもらえるのって、素敵だと思うな」

さも当然のように交わされるそんな会話……。

「け、健さん。どうしたんですか？おでこなんておさえて……」

「いや、カルチャーショックでちょっとしたフラッシュバックが……」

嗚呼、なけなしの小遣いで買った小さなカブトムシ（500円）にヒヤッホウしていた、五年前の自分……

俺の貧乏根性に多大なダメージを与えつつ、今夜の団欒はお開きとなった。

そして時刻は午後9時。

「…あのさ、本当にやんの？正直俺、すごい心配なんだけど」

「大丈夫…、とは100%言い切れませんが…」

ビル街から住宅街、学校、公園まで。海鳴市を一望できる高台に、俺とミューの姿があった。

その目的は、ミューの広域サーチで例のナニかの位置を突き止めるため。

…だけど、昨日の今日だし、俺はぶっちゃけ気が進まない。

それでも、

「私は…その、健さんの助けになるために、この世界にきたんです。だから健さんの…いえ、健さんだけじゃなく、お世話になってる月村家や高町家の皆さんのお役に立ちたいんです！だから…」

本人が至ってやる気満々なので、強気に出れない俺。

ついでに言えば、この子がこんなに饒舌なのも割と珍しいことだし…

「甘っちょろいよなあ…俺」

「え？」

おっと、脳内の声か。

「わかった。もうこの際だから止めないけど、無理は無しだからね？
また鬱モード入って周りに心配かけたら本末転倒だし、タートルズ
に協力を頼んだ意味がなくなる」

「は、はい！ありがとうございます…！」

そう言ってミューは俺に向かって腰を90°に曲げた。

「どっちかってーと、それは俺のセリフなんじゃ？」

「へ？あ、そう…ですかね？ふふっ」

お、笑ってくれた。

さして面白いこと言ったわけでもない気がするけど、リラックスしてくれたならいいか。

「とにかく、無理は禁止。何かあったら横からすぐ止めるから。オツケー？」

「はい。具体的な位置は無理でも…せ、せめておおまかな場所ぐらいは特定してみせます！」

いや、だからそんなに意気込んでいいというのに……

ハラハラしてるこっちを知ってか知らずか、高台の手すりに手をかけたミューは精神集中を開始する。

何でも、負けないよういつもより念入りにやるんだそつな。

とりあえず、現段階では見守ることしかできないので、正直手持ち無沙汰だ。

「ふう……」

何の気なしに空を見上げる。

キラッ

「…んっ？」

星空の中に一点、なんだか強く瞬く赤い光点が。

星…にしちゃ光がはつきりし過ぎてるし、ならへりコプター？

いや、なら音が聞こえないはずないよな。

「…ッ！？ け、健さん！ 上から何か降りてきます！」

へ？

「降りてくる……って、ひょっとしてアレ？」

言われてみれば、さっきより光点が大きい気が……

ってちよっと待て！

「ミュー、俺の後ろに入って！」

「は、はいっ！」

急いでミューを背後にやり、いつでもゲッターになれるよう身構えておく。

向こうのスピードはゆっくりみたいだけど、この状況でこの登場油断は禁物

「…あの。あれ、昨日のじゃないみたいです」

「え？」

「なんていうか、昨日のと違って怖くないんです」

俺の背中から顔を出し、覗き込むようにして恐る恐る見上げてくるミュー。

「それじゃ、アレは一体…」

そう言って上空に目を戻せば、もう赤い光はかなり近くまで降りてきていて、ようやく肉眼でもハッキリ見えるようになった。

光の正体は…

「…人？」

「人、ですね…」

うん、アレは人だ。

赤い光に包まれた人影が、仰向けの状態でゆっくり降りてきている。

『……………』

俺もミューも、ただただ呆然と上を見上げ続ける。

やがて、ソレは目と鼻の距離まで近づき、光が直視できない程眩しく感じられるようになったところで、俺は両手を差し出す。

何故か、こうしないといけない気がした。

そして目の前まで降りてきたソレを俺の両手が抱えると、眩いばかりの赤い光はスウツと収まっていった。

「これは…」

そうして、ようやくその姿がはっきりわかった。

『女の子…』

背丈はミューより少し高い程度で、褐色の肌とピンクがかった赤い髪が目を引き。

その髪は首もとで結われ、かなりの長さのそれが尻尾のように地面へ垂れていて、さらに頭頂部からは二本の阿呆毛アンテナが立っている。

服装は白と黒を基調とした騎士甲冑のようなデザイン。

しかし、上は胸部だけを隠してへそ丸出し、下はベリーショートなズボンにニーソックスというなんとも軽装な…っていうより、目のやり場にちょっと困る。出るとこ出てるし……。

「……おっ」

なんてまじまじと見ていたら、女の子がゆっくりと目を開けた。

「……………」

「……えーと」

で、目を半開きにした女の子は、その眠そうな顔で俺の顔をじっと見上げてくる。

……。
なんとというか、不思議な子だな。こっ、雰囲気が独特っていうか……。

なんて、気付いたら無言のまま見つめ合うこと十数秒。

いい加減俺の居心地が悪くなり、いよいよミューがオロオロし始めた頃……

無表情のまま、その子は口を開いた

「バルス！」

「……え？」

なのはside

「はあっはあっはあっ……」

こ……こんばんはっ。高町……なのはですっ。

「なのちゃん、大丈夫ですか？」

「う、うん……はっ……平気……だよっ！」

胸に抱えたアーンヴァル型神姫のこのは…愛称このちゃんが、私を心配そうに見上げています。

何でかと言つと…

「はっはっはっ…ふうっ…はあっ…」

息を切らせて走ってるからです……。

うう…、私の運動不足が悪いとは言えこのちゃんに心配させるなんて、不覚なのっ…！

私も、お兄ちゃん達やミケちゃん達みたく鍛えたほうがいいのかなあ。

「…あの、なのちゃん。やっぱりお家に戻って、みんなに事情を説明したほうがいいですよ！なのちゃん1人じゃ…」

「だ、大丈夫…だよ。このちゃんが…一緒だもんっ」

「そ、そういう問題じゃ…もっっ」

このちゃんが照れて顔を赤くちゃいました。

えへへ、かわいいなあ

…でも、本当にこのちゃんが一緒に良かったと思う。

さすがに一人だとちょっと心細かったし……。

それでも、行かなくちゃ。

今朝見た、男の子が出てきた夢。

怪我したフェレットさんを見つけた時。

パジャマに着替えて、ベッドに入ろうとしてたついき。

…声が聞こえたから。

助けてって、言ってたから。

だから、行かなくちゃ。

こんな私でも、誰かを助けられるかもしれないから。

この日、不思議な声と予感に導かれた私は、文字通りの“未知の世界”へ、第一歩を踏み出したのでした。

「この先はたしか……」

…タンッ

「ぜえ…はあ…ぜえ…はあー…」

「ああもう、無理して走るから！」

目的地の動物病院に着きました！

……それはいいんだけど、ノンストップで走ってきたから、息が……。

「ちょ、ちょっと休憩……」

「なるほど、夕飯の時に言ってたフェレットが心配になったってことか」

『ふひゃっ!?!?』

突然背中から声をかけられて、このちゃんと揃って変な声のでちやいました…ちよっと恥ずかしい。

…あれ?ついさっきまで人なんていなかったのに……

って、

「レオちゃん!?!?」

「レオナルドさん!?!?」

振り返るとそこには、目元に青いバンダナを巻いて、背中に刀を二本背負ったレオちゃんがいました。

「ああ、驚かせてごめんよ。
二人家からこっそり抜け出すのが見えたから、俺もこっそり後を追ってきたのさ」

「全然気付かなかった…!?!?」

「そりゃ、これでも忍だからね」

うう、まさか見つかったたなんて。あんなに気をつけたのに…。

「…ただし、誰にも言わずに、っていうのはいただけないな」

「う…」

バンダナの隙間から覗く目がちょっとだけ鋭くなって、私の体は縮こまってしまいます。

レオちゃんは、礼儀正しくて真面目で、いつもはとっても優しいのですが、その分怒ると怖いんです…。

「いいかいナノハ。生き物を大切に思えるのはとってもいいことだ。でも、君はまだ小さいんだ。

夜遅くに勝手に出歩いて、何か起こってからじゃ遅いんだ。賢いナノハならわかるだろう？」

「はい…」

「コノハも、君はナノハのパートナーなんだ。

ナノハが大切なのはわかるが、ダメなことはダメと毅然と言わなくちゃダメだ」

「…はい、すみません。仰る通りです」

全部レオちゃんの言う通りなので、何も言い返せません。

このちゃんも一緒に怒られることになっちゃって、悪いことしちゃったな…。

ポン

「うあ
「

すると、私の頭の上に大きな手がのせられて、すぐにレオちゃんの手だとわかりました。

レオちゃん達タートルズは亀さんなので、指が三本しかありません。ちよつと不思議な感触です。

「何にせよ、何事もなく良かった。あんまり心配かけさせないでくれよ?」

「はい、ごめんなさい」

「ああ
「

レオちゃんは屈んで私と目線を合わせ、優しく私を撫でてくれま

「ナノハ？」

突然、頭の中で耳鳴りのような音が響いた。

「この音…！？」

「ナノハ、どうしたんだ！？」

「大丈夫ですか！？」

大丈夫…って伝える間もなく、異変は更に続く。

「なにつ！？」

「空が…！？」

空だけじゃない。

家が、塀が、電信柱が、視界に入るありとあらゆるものがまだら模様に染まっている。

そして、

ドオンー!!

『!?!?』

動物病院の塀の向こうから轟音が聞こえ、私たちははじかれるように中へ走り込む。

「…ふええ!?!?」

目に入ったのは地面のあちこちが抉れた庭と、病院の窓ガラスを割ってもぞもぞしている、

黒い、大きな“ナニか”

「コイツは一体…!?!?」

レオちゃんが刀の柄に手をかける横で、私は見つけました。

「あっ！」

黒いお化けの足元（？）から、首に赤い宝石をつけたあのフェレットさんが！

オオオオオ！！

「きゃあっ！」

「くっ…」

フェレットさんに逃げられたのに気づいたのか、お化けがまた暴れ出しました。

地面がさらに捲り上がり、端に生えてた木がバキバキ音をたて倒れる。

「あっ！」

お化けが暴れた余波で、フェレットさんの小さな体が吹き飛ばされた。

首の宝石を光らせながら、フェレットさんは私の方に飛んできて

……

「きゃっ!?!」

「わわっ!」

胸元でキャッチできました。バランスを崩して倒れそうになったけど、レオちゃんが横から支えてくれました。

……って、今このちゃんがムギユってなったような!?

「このちゃん大丈夫!?!」

「は、はい。私は大丈夫です。
それよりも……」

このちゃんの視線は隣のフェレットさんへ。

腹や前足に包帯を巻いたフェレットさんは、私の顔を見上げて目をぱちくりさせてます。

良かったあ、元気そうで……

「来て、くれたの？」

『喋った！？』

喋った！フェレットさんが喋った！

…はづ。もしかしてこの子はフェレットさんじゃなくて、オコジヨさん！？

ちよつとエツチでオヤジくさい、オコジヨ妖精さん！？

「あ、あなた達は…！？」

フェレットさんはフェレットさんで、レオちゃんとのちゃんを何度も見返して目を白黒させてます。

「話は後だ。つかまれ！」

「ふえ！？」

オオオオオオツ!!

と、再び地の底から響くような鳴き声が聞こえたと思ったら、レオちゃんに抱えられてその場から跳び退く。

次の瞬間には、私たちのいた場所に、黒いお化けが突っ込んできて、土煙が上がった。

…ウウウウ

土煙が晴れ、お化けの姿が露わになる。

うなり声を上げながら、2つの赤い目で私たちをギョロツ睨みつけ、大きな口をガバツと開けた……

オオオオオオオオオン!!

「ふええええええええええ!!?!?!?!」

10話「ウルトラマンダイナは、やられると非常に残念な感じになります。つま

なんとか書き上げた……

忙しい毎日ですが、日曜日は基本的にオフにしようという話になっているので、コレを利用しようと思います

ですので、次回は一週間から二週間先になります。少々お待ちください

それではまた次回ノシ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7883t/>

魔法少女リリカルなのは 英雄達の邂逅

2011年10月30日21時26分発行